

英語に於ける名詞的表現の諸相(Ⅲ)

——主として「談話体」に於ける場合のそれを中心にして——

小 林 永 二*

On Some Aspects of Noun-centered Expressions in the English
Language with Special Emphasis on Those in the Spoken Form

Eiji KOBAYASHI

はじめに

我々は普段自分達の母語である日本語についてその表現様態などを特に意識することはない。ドイツの詩聖 Goethe (1749-1832) の云う「外国語を知らぬ者は、自国語をも知らない」の台詞ではないが、我々が自国語である日本語について特に強く意識するのは、その外国語との対比に於いての時を除いては外にはない。更にこのことに加えて日本語そのものが今流行のコトバで云えばハイブリッド (hybrid=混血種, 雑種) であることに我々日本人が意外と気付いていない事実がある。漢語の日本語に与えた影響の大きさは、実は我々の想像以上のものがあり、語彙の面から始まって、その表現形式、文体の面にまで及んでいる。従って一口に日本語と云っても決して一様のものでなく、言語学的には厳密な区別が必要にもなるのである。例えば日本語に本来固有の大和コトバを中心としたものなのか、それとも主として漢語を中心とした訓読調の文体のそれなのか、或いはそれら両者が複雑に入り組んで混然一体となった謂ゆる漢字仮名交り文、昔風に云う和漢混淆文なのか (勿論現代の標準日本語はすべてこの漢字仮名交り文である事は否定し得ないわけだが)、ところで実は現在の日本語の実態は、それらのいずれでもある場合もあり、又そうでない場合もあると云った極めて複雑な様相を呈している。現代日本語の表現は誠に種々様々であり、マンガ本から始まって学術論文に至るまで、語彙をはじめ、その表現形式、文体等は当然にもその差は余りにも大きいのである。ここではそれら日本語の諸相を色々の角度から分析詳述するのが本意ではない。それらは独立の一つのテーマとして語られるべきものである。ただここでは英語に於ける名詞表現と云う事とも関連して、日本語に於いて名詞表現とも云い得る若干の例をも掲げてみたが、その場合にその名詞表現が殆んどの場合漢語表現に負うていると云う事実がある。謂ゆる大和コトバによる名詞表現なるものは殆んど見られず、中国渡来の漢語を借りて始めて英語に匹敵し得るが如き名詞表現が日本語に於いても可能になると云う事である。ただこの際特に注意すべき事実として、日本語に使われているそれらの漢語の品詞や用法と云ったものが、本来の中国語に於けるそれらと常に同一のものとは限らぬ、否往々にして異なる場合が多いと云う事である。勿論、この際日本人が勝手に後から作った日本製字音語については論を俟たぬ。日中両国で同じ

* 英語英文学研究室 (昭和59年9月17日受理)

様な語や表現を用いながらも、微妙なところで若干の差異が見られると云った例を先ず考えてみたい。一旦日本語の中に入って使用されている以上は、日本語の文法範疇の中で処理されるべきは当然ではあろうが、併し同時にそのルーツである中国語の文法範疇に於いてそれらがどの様に位置付けられているのかを知ることも決してムダな事ではなからう。否、そのルーツに遡ることなくして現在の日本語の中での漢語使用の正しい理解も有り得ぬものと信ずるが故である。いずれにせよ、英語に於ける名詞表現に対比して考えられる日本語の名詞表現なるものは、漢語表現（厳密には日本的漢語表現と云った方がヨリ正確だとも云い得るが）を抜きにしては先ず考えられないので、どうしても先ずこの漢語表現なるものの実態をよく把握し、特にその日本語の中での性格を認識しておく事が必要と思われる。早速実例を見てみよう。

“My apologies, Madam.”（奥様、大変失礼致しました）なる英文に於いて、和訳部分との決定的な違いは、要するに「あやまる」部分の表現が英語では *apologies* なる名詞で表現されているのに比し、日本語では「失礼する」とか「悪かった」の如く動詞或いは極めて用言性の強い表現で表わされるのが普通である。その事はこれまでも何度となく例を挙げて説明してきた事であり、今更とり立てて云う程の事もない筈なのだが、少し視点を変えて、例えば日本人でも場合によっては、何か相手に申し訳ない事でもした時に「失礼！」などと叫ぶこともある。この云い方は日本語に於いても名詞表現と云えるのではないかとの疑問である。そこでこの「失礼」なる語を中国語にまで遡って調べてみると、どうも中国語では「失礼」なる語は動詞らしいのである。例えば、“太失礼了”。と云えば、「大変失礼致しました。」との意で、これは明らかに「失礼」は動詞として使われている。ところで「失礼」とよく似た意味の語に「失敬」があるが、これもどうやら中国語では動詞らしいのである。ところが中国語で“失敬！”と云う表現があるが、この場合は、この語の例えば品詞をどう考えればよいのだろうか。動詞なのであろうか、それとも名詞なのか、それとも感嘆詞の様なものなのか、等々種々の疑問が湧いて来る。苦しまぎれに、これを「応待語」だの「挨拶語」だのと云う人もいる様だが、どうも何となく釈然としない。ただ同様の意で中国語に“失敬失敬”や“失礼失礼”などの表現もある様だが、こうなるとどうもこれらは例の「動詞の重ね型」に属する表現だと考えられて来る。更に「失礼」について日本語で詳しく調べて見るに、先ず日本語ではこれは基本的には名詞だろう。更に語尾に「だ」をつければ形容動詞にも成り得る。更にこの名詞を感嘆詞的に用いると、先述の「失礼！」なる表現となる。「失敬」についてもほぼ同様の事が云い得る。更に「失礼する」については、日本語では「失礼」は当然名詞として捉えており、それに「する」なるサ行変格活用動詞を加えて、全体として「失礼する」なる漢語系動詞を大和コトバ動詞「する」を借りて造語したものと考えられる。勿論この様な造語法により作られた漢語系動詞はあまりにも多い。本来はすべて単音節語より成る中国語に於いて、更に又形態変化を欠く孤立語に於いて、その品詞区分は必ずしも明確なものではなく、又実際にこれを行う事も必ずしも容易ではないのである。中国語文法の範囲内に於いても品詞をめぐる様々な論争が絶えないのも無理からぬところである。我々としては今ここでそれら中国語内部の諸事情には拘泥しない。ただ日本語の中に取り入れられた漢語は殆んど須く名詞として取扱われていると云う事実だけは忘れてはならない。又それらの語が、本来の中国語では必ずしも名詞扱いではない語の多いと云う事実も又忘れるべきではない。その様な事実認識の上に立って、今後我々は日本語の中で使われている漢語や漢語表現に対処して行きたいと思うのである。実はこの事はカタカナ外来語についても同様に云い得る事なのであ

る。これらの事とも関連して例えば、日本語の名詞は本来分析的性格が強く、特別な形態変化を有しない為、容易に外来借用語に依る代置が可能であるに比し、日本語の動詞は本来は総合的性格が濃厚で形態変化を有するが故に借用外来語に依る置換は必ずしも容易ではない。漢語系動詞と異なり、本来大和コトバ系動詞の持つ外来語に対する抵抗力は非常に強い、名詞は簡単に漢語やカタカナ外来語に代置可能であるが、動詞についてはそう簡単に首をすげかえることは出来ないのである。日本語に本来固有の大和コトバ動詞はこの過去2000年近い年月を経ても、なおその生命力は旺盛で、全品詞の中では最も高い借用外来語に対する抵抗力を示している。我々日本人が最も基本的なところで物事を考える時、恐らく間違いなく「大和コトバ動詞」を用いて考えている筈である。これはとりもなおさず大和コトバ動詞の持つ基本的な語義の広さ、抽象度の高さ等が、他の機能語 (function word) との統語的関連に於いて、日本語に於ける分析的表現の存在を可能にしているのである。ところで漢語系動詞の場合は、漢字二字に「する」をつけて、サ行変格活用動詞にしているのであるが、その場合の行為名詞は中国語で多くの場合動詞としても使われているのであるが、日本語ではそれら行為名詞はそのままでは動詞として使用不可能で、それを謂わば名詞扱いにして、その後「する」なるサ行変格活用の大和コトバ動詞を添えて、語義の狭い、抽象度も比較的低い新種の動詞を造語したのである。ただ現実これら漢語系動詞が現代日本語の中で重要な地位を占めている事実も否定し得ぬ。昨今我々は日本語の中に数多くの外来借用語を見出すのであるが、先述の論法で行けば、これら外来借用語（漢語とカタカナ外来語から主として成り立っている）は、それらの原語に於いて如何なる品詞として用いられていたかに関係なく、一旦日本語の中に導入されるや、殆んど須らく「名詞」として用いられると云う事になると、これは日本語の語彙体系や表現形式、文体等に決定的に重要な影響を与えずには置かないのであり、そして結果としては、日本語は本来のその動詞中心的性格のそれから英語や中国語に於けるが如き名詞中心的 (noun-centered) 性格のそれへと変容を強いられ、結果として名詞中心的 (noun-centered) 性格の濃厚な言語へと移行しつつあるのではないかと当然にも考えられる次第である。筆者が英語に於ける「名詞表現」なるものを考える時には、実は常に日本語に於けるそれをも同時に脳裏に思い浮かべながら考えているのもそれなりの理由あっての事なのである。借用外来語は語彙の単位から始まって必然的にその表現形式、文体にまでその影響は及んで行くのであり、そこよりして日本語はその土台骨からその変容を迫られているし、又現に変容し来たのであり、今後も変容し続けて行くのであろうが、その変容とは即ち、「名詞表現」への傾斜であると云っても過言ではあるまいと云う気がしてならない。日本語の将来を考える観点からも、この「名詞表現」なるものを、それなりに考究し続ける必要性を痛感する。正にこの「名詞表現」なるものは、それだけの広がりを持つた問題提起を与えてくれる重要な研究対象なのである。

I. 英語「名詞表現」再考

文体 (style) と関連して英文の理解に欠かせないものに句型 (sentence pattern) がある。普通我々が英文の句型分類として学校文法で習うものに例の基本五句型 (「S + V」, 「S + V + C」, 「S + V + O」, 「S + V + O + O」, 「S + V + O + C」の各句型を云う) なるものがある。勿論これでもってすべての複雑な英文を分類説明しつくせるものではあるまい。事はそれほど簡単な筈もなからう。現に英文の句型分類に関しては学者の間でも諸説紛々としており未だに定説はない。分類の基準が異なれば当然に句型の数も異なる。併し

ここではこの問題にはこれ以上触れないで、上述の基本五文型についてのみ考察を進めることにしたい。勿論この基本五文型にしてからがそれ自体に問題を含んでいないわけではない。例えば或る文章があるとしてそれをどの文型に入れるかに関して、必ずしも説得力を持ち得る説明があるとは限らない。しかしそれらの問題についてもここでは立入らない。一応基本五文型なるものを認めた上で論を進めたい。それは当面の問題を論ずるにはそれで十分だと思うからである。

ところで「名詞表現」と一口に云っても、現実の文章の中ではそれなりに複雑な諸相を見せていることについてはこれまでも詳述してきた積りである。ここでは今一度文型とも絡めて「名詞止メ」と云う観点からこの問題を考えてみたい。

先ず基本五文型の中で、第三型「S + V + O」と第四型「S + V + O + O」については文末がOで終わっていることよりして明らかに「名詞止メ」と云い得る（但しこの場合、代名詞も一応名詞の中に含めて考える。更に修飾語が文末に来て必ずしも文字通りには「名詞止メ」に終るとは云えない場合もあるわけだが、ここではあくまでも文の主要成分 (the elements of the sentence) についてのみ考察の対象とする。文の主要成分と云う場合、中日両文法などでは当然にも英語のそれとは異なって考えている様だが、ここでは通常英語文法に従って S・V・O・C の four elements としておく)。更に第二文型「S + V + C」及び第五文型「S + V + O + C」に関しては文末がCで終ることから、「名詞止メ」も有り得るが、そうでなく形容詞で終る場合もある。第一文型「S + V」については、原則として「名詞止メ」(noun-ending) は無理となろう。勿論上述の如く、ここでは修飾語 (modifier) は考慮されておらず、更に形容詞と云っても名詞を中心にした「名詞止メ」の型を持った形容詞句も有り得るわけで事はそれほど単純ではない。ただ筆者がこれほどまでして何故この問題に固執するのかと云えば、やはり筆者の頭の中には英文の発想法、思想の構え方として修辞学 (rhetoric) で云う Loose sentence (散列文) なるものがあり、つまり英文では先に結論を述べるために主語に次いですぐに述語部分が現われる。その為にOやCがVの後に来て結果として「名詞止メ」を招来しやすい。これに反し日本語では修辞学で云う Periodic sentence (掉尾文) の型をとるため、述語部分が文末に来ることになり、原則として「名詞止メ」は無理で、どうしても「用言止メ」とならざるを得ぬ。更に英文の基本文型は近代英語 (Modern English) 以降、上例で云えば第三文型に属する「S + V + O」であり、この文型に於けるVは云うまでもなく他動詞である。自動詞・他動詞と云う区別で考えれば基本五文型の中、第3、4、5文型に現われる動詞はすべて他動詞であり、第1、2文型のみが自動詞から成る。英語に於ける基本文型はあくまでも「S + V + O」の他動詞構文であり、又文中に現われる頻出度もこの文型が最も高い。この事実こそが又英文に名詞表現の多い理由の有力な一因であり、従って又「名詞止メ」を作る原因ともなっているのである。

それに比し日本語の場合は如何であろうか。英文の文型分類を日本語のそれに適用することの無理を十分に承知の上で、敢えてこれを行うとすれば、日本語に於ける基本文型は「S + V」ないしは、「S + C + V」であろうと思われる。それは何故であろうか。云うまでもなく原因の決定的なものとして、和文には他動詞構文が非常に少く、現に日本語の動詞はその殆んどが自動詞より成ると云ってよい。特に自他の区別をしない限り、我々は普通動詞は日本語の中では自動詞として無意識に把握しており、現に日本語に於いて自動詞と他動詞の区別は、特に助動詞などの助けを借りないと、必ずしも明確ではない。この日本文が基本的に自動詞構文より成ると云う事実こそが、英文に比し日本文に名詞表現が

さほど多く見出されず、又「名詞止メ」の少い理由の有力な一因ともなっているのである。

ところでこの辺りでいよいよ本論に立ち返らねばなるまい。つまりここではあくまでも「談話体」の中での名詞表現の様態如何を探ることであった。それに関連して先述の修辞学 (rhetoric) で云う Periodic Sentence (掉尾文) と Loose Sentence (散列文) の差異について少しく具体的に見てみよう。先ず日本語がそこに属するとされる periodic sentence (掉尾文) とは、一口に云って文尾になって初めて文意の完結する型の文であり、荘重にして演説口調の文語体に向く。例えば日本語では、細かく附帯事項を述べておいて、文尾に至ってはじめて文意のしめくりをつける。従って緊張が最後にまで持ち越されるので、別名これを Suspended Sentence とも云う。一方、英語がそれに属するとされる loose sentence (散列文) とは、一口に云って主要な部分を先に述べて結論を先に出して仕舞う。然る後、第二次的な事柄をゆっくり追加して行く形式をとる文であり、従って緊張は先にほぐされ (loose とは気分が弛んだ状態を云う)、文の途中どこで区切ってもそれなりに文意が通ずる。この文形式は、口語「談話体」に向いていると云える。

さてこの様な対立し合う二つの文形式とその相異なる性格を認めた上で如何なる事が云えるのであろうか。先ずはここで問題のテーマとして取りあげた「談話体」については、そもそも文の表現形式からして英語の方が「談話体」に向いているのだと云う事になる。一方日本語の方は「談話体」には本当に不向きなのであろうか。よく云われる事に、日本語では「文の成分」は必ずしも文章の中に現われず、敬語や敬意表現、文脈 (context) や場面 (situation) に頼る表現が多い。従って必ずしも完全な文型式を具えた文章で書かれ、話されているとは限らない。それに比し、英語では常に「文の成分」(The Elements of the Sentence) を明確に表わし、文脈・場面に頼らずとも、一個の独立した完結した文章として、どの部分を切りとってでも理解可能であるとされる。

確かにこの様な説明は我々もよく聞かされるところであり、考えてみればそれなりに理屈も通っている。ただ問題は、日英両語の現実のコミュニケーションの中での「談話体」の様態を仔細に調べてみると、必ずしも上述の事実のみがそのすべてではない事が分る。その事が結果的に「名詞表現」の頻度の大小とも関係してくるのであり、その意味でも一考に価すると思うからである。

それでは「談話体」に関して日英両語の決定的な違いと云ったものは奈辺に存するのであろうか。人によってそれぞれ考え方もあるだろうが、筆者の見るところでは、やはり日本語に於いては、謂ゆる「丁寧体」と「普通体」と云った区別が厳存するに対し、英語では日本語に於ける程にそれらは峻別されておらず、質量共にその差異は小さいと云う事であろう。更にそれら「丁寧体」と「普通体」の使用される範囲や領域が、日英語間に於いて異なっており、これを要約すれば、「丁寧体」の用いられる範囲、領域は日本語に於いて、英語のそれに比し、遥るかに大きいことである。これを換言すれば、日本語では当然「丁寧体」でもって対処せねばならぬコミュニケーションの領域が、英語では「普通体」で事足りるとされる事実が存するのである。この事を更に決定付ける様な云い方をすれば、日本語ではそのコミュニケーションに於いて formality が尊重されるに比し、英語では同様の場合に informality が尊重されると云う、正にこれは言語の問題と云うよりも、むしろ文化の領域に属する問題と云った方がよいのかも知れない。而してここより一般に日本人の「物云い」は「バカ丁寧」(overpolite) と云い得る極めて冗長 (redundant) にして、婉曲な (euphemistic) 表現が好まれ、一方、英米人のそれは卒直にして簡潔明快、更に直截な「物云い」こそが好ましいとされる。この事は先述の日本語での「文の成分」を省略

し、多く「場面・状況」に依存して出来るだけコトバを切りつめて会話を行うと云う。一般によく知られている日本式コミュニケーションの様態と一見矛盾しているとも考えられなくもない。一体その真相は奈辺に存するのであろうか。

先ず云い得る事の一つとして、一見英語のそれを凌ぐとさえ思われる日本語での談話体の簡潔さも、実はその様な会話が交わされる範囲は極く限られた少数の in-group (家族の者を始めとして、親しい友人や同僚など) の中でのみ可能なのであって、実際にはその様な「普通体」で済まされる範囲はそう広くはないのである。日本人がその日常生活のコミュニケーションの中で「普通体」で済まされる場面は全体の割内外に過ぎず、あとの九割に当る場面では実は「丁寧体」でないと事は済まないのである。早い話が日本人は物を断定して「云い切る」形が不得手であると云われる。更には人にズバリ命令する様な形での「物云い」も苦手である。日本語の動詞には文法上は終止形や命令形が存在するが、実際にはその両者が生の形でズバリ用いられるケースは極くまれである。それに比し、我々は連用形の中止法を用いて「間」を持たせたり、又同じ連用形から接続助詞につなげてやはり「断定した物云い」を避けようとする。更には助動詞の「です」・「ます」を用いて丁寧体とし、謂ゆる「デス・マス体」でもって動詞終止形で終るドライさを緩和させようとする。更に命令形についても同様に生の形での命令形はめったに用いられず、補助動詞や助動詞更には助詞の助けを借りて出来るだけ生の命令形から来る「ドギツさ」(brusqueness or bluntness) を緩和しようとするのである。実際日本語に於けるこれらの表現に用いられる「緩和剤」(anodyne) としての補助動詞・助動詞・助詞の複雑多岐に亘るその発達振りは目を見張るものがある。例えば英語に於いても助動詞を用いて婉曲表現をしたり、中国語に於いても謂ゆる語気助詞なるものが文全体の表現を柔らげるのに用いられる事が有り得る。しかし両者に於けるそれらの修辭法も、日本語のそれと比較すれば物の数ではない。日本語の「丁寧体」の中に現われる敬語や敬意表現は英語や中国語の中には見出されない極めて日本語に独得の表現が多いのである。

さてこれらの事実より、一見省略の多い簡潔な表現と思える日本語の談話体も、実際にはさほど簡潔に行なわれず、逆に極めて冗長な物云い (redundancy) の連続となっているのである。この事を実際の日常生活の場面での談話体の中に具体的に探ってみたい。その手掛りとして特に「挨拶語」、人の「呼称」、更に人間の「喜・怒・哀・楽」に關した「感情表現」等の中に日英語の表現様態に如何なる差異が見られるやを考察してみたく思う。これまで簡単に見てきた範囲だけに限っても、日本語の物云いは、その文型、表現形式、文体等のいずれの面から見ても名詞表現に馴染まぬものが多い様に思えるのに、一方英語では逆に文型、表現形式、文体等のどの面をとっても名詞表現に極めて適合性を有しているやに思われるのであるが、その辺りはいずれこれから若干の実例にも当たりながら詳述してみたいと思う。

ところで筆者は日本語での談話体においてよく文の主要成分としての主語の省略のあることを指摘した。確かに別に談話体に限らず、日本語の表現形式に於いて、名詞、代名詞の使用比率は英語などに比し遙るかに低く、その表現の中心は periodic sentence (掉尾文) の特徴として、必然的に文末に置かれるのであり、又日本文が動詞で文末を終るものが大半であることを考え合わせるならばその事は又当然の事でもあるのだ。つまり日本語の表現形式では正に『動詞は文の魂である』(Verb is the soul of the sentence.) と云えるのである。その辺りは文の表現形式が名詞中心型であり、基本文型として「S+V+O」をとり、従って文末を名詞で終る (つまりは「名詞止メ」のことである) 英語との決定的

な相異を見せている。およそ如何なる言語に於いても、文頭と文末が文の構成要素の中で最も重要な部分を成しているのであり、文頭には主語が来る点では日英両語に共通であるが（但しこれまでも論述した如く、文頭の主語さえも日本文では往々省略されることがある）、文末を名詞で終るか動詞で終るかでその文章の表現形式は勿論の事、その与える印象や効果が異なってくる。往々にして名詞たる主語を欠き、文末の動詞に文意の大半が集約されている和文と、文頭と文末にそれぞれ名詞を配し、その間に動詞を介在させている英文とでは、その文中に占める「名詞 vs. 動詞」の役割の相対的重要度は正反対のものであると云えよう。つまり英語はあくまでも名詞集約性の言語であり、日本語は逆に動詞集約性の強い言語なのである。それから日本語に於ける主語の省略の問題であるが、つまりは動詞が主語の役割の一部を兼備しているのではないかの考えも成立し得る。例えば敬語や敬意表現が英語の人称変化の代りを務めているため、日本語では主語や代名詞などの使用が必ずしも必要でないと云った場合もなきにしもあらずなのである。更に日本語では、主語の性格を考えてみるに、遡くとも本来の大和コトバに於いては抽象名詞主語と云うものは少い。抽象名詞を主語に立てようとするれば、どうしても漢語の力を借りねばならない場合が多くなる。つまりここでは、具体的な物が主語に立つか、それとも抽象的な名詞が主語に立つかにより、述語部分の形態に変化が見られると云う事を云いたいのである。早速実例に当たってみよう。

実例〔Ⅰ〕 この辺りはバスがあまり来ない。(The buses don't run very often around here.)

実例〔Ⅱ〕 この辺りはバスの便が悪い。(There is no good bus service available around here. or No good bus service is available around here.)

さて実例〔Ⅰ〕の場合は「バス」と云う具体的な物が主語に立っているので述語部分としてはカ変動詞「来る」の未然形「こ」と、打消しの助動詞「ない」の終止形がそれに接続している。いずれにせよ「来る」と云う動作動詞が使われている。それに比し実例〔Ⅱ〕では「バスの便が」の如く「便」なる漢語抽象名詞が主語に立っており（実は大和コトバで「便」に当る様な抽象名詞を求めると自体に無理があろう。従って「便」なる漢語抽象名詞を借用しない限り、実例〔Ⅰ〕の様な表現しか出来ないのではないか。）、述語としては形容詞「悪い」が使われている。而してこの例では動作動詞は一切使われていない。つまり抽象名詞が主語に立つと、動詞の使用が少くなり、日本語文法で云えば形容詞や形容動詞（「この辺りはバスの便が貧弱だ」と云えば、この時の「貧弱だ」は形容動詞である）が述語部分を構成する。英文の場合では形容詞だけで述語部分を構成することは出来ないが、動作動詞ではなく、be動詞或いはそれに準ずる動詞であって、相対的に動詞の持つ比重は軽くなる。一般に抽象名詞主語の場合に限らず、日本文で動作動詞の用いられている様な文章が、英文では述語部分に動作動詞が用いられず、be動詞やそれに準ずる状態動詞に形容詞や名詞が補語の形をとって全体として述部を形成している場合が多く、やはりその様な場合は動詞の比重は軽い。つまりこの事は英文に於ける表現の形式が、「物理的・空間的位置関係」、動作の途中のプロセスよりも、その動作の行われた後の「結果」や「状態」に叙述の重点が置かれる為に、全体として静態的・図式的な描写となり、結果として静的安定性に富んだ名詞を用いる表現が行なわれることになるのであろう。日本語の叙述・描写法は全くそれと逆に、或る動作の途中のプロセスをダイナミックに捉えようとするため、どうしても動作動詞中心の叙述となりやすい。

ところでこの辺りでどうしても一つ考えておかねばならぬ問題がある。筆者はこれまで何気なしに簡単に「日本語」なり「日本文」などのコトバを使用してきたのであるが、実

はその中味はそれほど単純なものではない。現代日本語と云うことになる、その語彙の面から見て三つの系統に大別される。それは云うまでもなく、日本語に本来固有の大和コトバが先ず存在する、次に5、6世紀の頃から徐々に我国に導入されてきた中国渡来の漢語であり、最後に幕末から明治維新更には今次の太平洋戦争後に流入された夥しい数のカタカナ外来語がある。語彙だけの面に止まらず、「文体」の面でも、「漢文体」や「欧文脈」or「翻訳調」などの用語も存在する様に、大和コトバを主体とした仮名文字文体とは一味も二味も異なる外国語の影響を多分に受けた文体もすでに現代日本語の中に定着している。我々はその典型例を謂ゆる「学术论文」なるものに見出すのである。一口に云ってそれらの「漢語調」・「漢文体」なり、「欧文脈」・「翻訳調」なりと呼ばれるものの「文体」なり「用語法」は、動詞集約性の強い大和コトバによる仮名文字文体のそれと異なり、名詞集約的な性格を濃厚に有している。その意味で英語の文章表現形式にそれだけ近いと云えるのである。この様な外国語の語彙や文体が日本語に与えた影響については、それだけで立派に一つの研究テーマと成り得るもので、従ってここでこれ以上それについて論を進める余裕はない。筆者としてただ云いたい事は、一口に日本語や日本文と云っても種々の様態があり、必ずしもこれまで筆者が述べて来た様な動詞集約性の強いものばかりとは限らないと云うことである。場合によっては英語のそれをも上廻るほどの名詞集約的表現もないわけではない。併しその問題についてはここではこれ以上立入らない。いずれ機会を見て是非この問題に取り組んでみたいと思っている。「談話体」における日本語だけを考えた場合には、先ず語彙の面からは、漢語よりも大和コトバ（「和語」とも云う）の使用比率が高く、又その文体も「漢語調」や「翻訳調」よりも、平易で「こなれた」本来の和風文体が使われる。「文章体」の場合はこれと逆の事が云えるであろう。実際日本語に於ける「談話体」と「文章体」の差異は英語のそれを遥るかに上廻るものであり、とても同一の言語に属するとは思えない場合もなきにしもあらずなのだが、実は程度の差こそあれ、同様の現象が英語にも見られなくもない。例えば英語に於いて、「文章体」にはラテン語・フランス語系統からの借用語 (loan words) が多く使用され、一方「談話体」には本来の固有アングロ・サクソン語の使用比率が高くなる。ただ日本語の場合のそれとちがい英語の場合ではラテン系の外来借用語にその名詞表現を負っている反面では、本来の固有アングロ・サクソン語では品詞の転用 (functional shift) が比較的自由で、更に単音節語 (monosyllables) から成るものが多いだけに、非常に数多くの簡潔な名詞表現を生み出している。勿論英語に於いても、その談話体では外来の loan words よりも、固有の Anglo-Saxon 語の比率が高いわけであるからと云って、日本語の「談話体」に於ける如き動詞集約的性格にはならず、依然として或いは「文章体」のそれをも上廻る名詞的性格を維持し得るわけであり、その点は日本語の場合とは大きく異なるところである。本項でとりあげた諸問題については、まだまだ色々な角度からの議論も可能ではあるが、紙数の制限もあり、一応このあたりで筆を擱くことにする。

II. 「談話体」に見るコミュニケーションの様態比較

——「英・中・日」各語の場合——

一般に言語の習得には四つの側面のあることは夙に知られているところである。即ち hearing, speaking, reading, writing のそれである。例えば英語の習得に於いてもこの四つの技能 (four skills) が要求されるのは御承知の通りである。前半の2技能は、これを英語について云えば、spoken English に係わるものであり、後半の2技能は、written English

に係わるものとなる。これを換言すれば spoken English は「談話体」に於いて使用され、written English は「文章体」に於いて使用されるものとしてもよい、而して本項では主として「談話体」を問題として取上げようとしているが故に、当然にも我々の関心事は spoken English の側にある。

およそ英語に限らず、如何なる言語体系に於いても、文明語と呼ばれるもののそれには、「文語体」と「口語体」或いは「文章体」と「談話体」なる2種の表現形式が存在するものとみてよい。ただその際問題となるのは、各言語を取巻く文化的・社会的環境の相違に応じて、それら二文体の表現形式が現実のコミュニケーションの場に於いて占める役割の軽重、その使用頻度の相対的高低、更にはそれらの守備範囲の限界、最後にはそれら二文体の性格内容と相互間の距離の差と云ったものがそれぞれの言語によって当然にも異なると云う事である。ところで、例えば日本人は視覚型で non-verbal communication に長じ、英米人は聴覚型で verbal communication に優れていると云われている。

例えば日本人の場合は、その歴史の初期の段階に於いて中国より書物を通して漢字とその文化を摂取し、教養とは即ち古典の書物に通暁することを意味し、徳川三百年に及ぶ長い鎖国と封建制の下で、謂ゆる言論の自由な表現は圧殺され、ただひたすら古典の書物の中に埋没することが教養人に是とされたのである。そこでは verbal communication の重要性は育たず、その伝統は或る意味では今日に至る迄根強く尾を引いているとも云える。それに比し後者のそれはギリシアのソクラテスの弁証法に始まり、常に verbal communication の伝統が根付いており、英国においていち早く議会政治が世界にさきがけて成立し、言論による自由な相互の意志の疎通と、明確な自己主張とが尊重される伝統を育ててきたのである。アメリカのハイスクールなどでは「スピーチ」なるクラスが設けられているところもある様だ。フランスあたりでも、「話し言葉」の基準を国家が決めている程の力の入れようである。従って英語そのものが、「話し言葉」中心に発達し来たり、又それに適合した様に現在作られている。それに比し、例えば日本語の場合を考えてみればすぐ解ることであるが、普通のやや改まった会合やスピーチの席上でも、音として聞えてくる日本語の中には何となく解りにくいコトバが多く、よく黒板を使って漢字を書き出しながら話を進めていく光景を目にすることがある。それから、話をする側にも、それを聞く側にも、verbal communication に対する信頼度が今一つ欠けている様に感じられることは、それらの会合なり会議なりの実状をつぶさに観察すれば、どうしても否認しない事実である。そこより「根まわし」なる極めて日本的なコミュニケーションの仕方が生まれてくるのであろうか。つまり日本では、会議をする前から或程度すでに結論が出て居り、会議の場でのやりとりはただ恰好をつける為だけのものらしい。実際日本語の中には、謂ゆるアカの他人 (out-group に属する人間) との communication の円滑な実行を可能ならしめる様な適切なコトバや表現はあまり発達せず、この点は英語のそれと比べて確かに見劣りがする。我々がテレビで、外国の映画やドラマを日本語に吹き替えられたものを聞いていて、非常に不自然に感じる事がよくある。これを人は翻訳だから当然多少の不自然さは伴うものだと思っているのかも知れない。確かに「翻訳調」と云うコトバもある通り、それもその一因ではあろう。併し大方の人が気付いていないかも知れぬことは、そもそも日本人と英米人とでは、その映画やドラマの中に於いてさえ、communication の仕方そのものに差異が存すると云うことである。極端に云えば、日本人が黙っている様な場面でも、英米人ならば何かセリフを云っているのかも知れぬ。それを仮りにそのまま和訳してその場面にセリフを入れれば、聞き手の側は、その翻訳調の和訳の不自然さ以上に、そもそもその様なコ

コミュニケーションの仕方に、奇異な不自然さを感じるのである。そのことはまさに筆者がこれまで述べてきた、日本人と英米人のコミュニケーションの在り方の差異の証左であり、そのことは必然に日英両国語の現実の姿に差異を伴って現われて来るのである。これを具体的にもっと解りやすく云えば、例えば日本語ではかなり固苦しく「文章体」で云っている様なところを、英語ではくだけた「口語体」で云っている様な場合がある。大まかに云って、日本語では formal な文章体で云うところを、英語では casual 又は informal な「口語体」で済ませる場合が非常に多い。更に例えば手紙などの場合も、日本語ではまず日常会話的な style で手紙を書くことは不可能に近く、又その様な例はめったに聞かぬ。それに比し英語の場合も勿論確かに手紙用の文語的 style が存在しているが、親しい間柄同志の場合など、かなりくだけた口語体に近い style で書かれている手紙も多い。この場合云うまでもなく名詞表現が従横に駆使されている。何故なら、簡潔に、解りやすく、要点のみをしぼって書こうとすれば、否応なしに名詞表現を用いざるを得ないからだ。日本人が、「内」と「外」を極端に意識して行動し物を云っている限り、他者との間に、英語のその様な、生々とした、伸びやかな感情・意志表出に適した口語表現の発達は望み薄である。我々が、名詞中心型のテキパキとした英語の口語表現に一種の胸のすくような魅力を感じるのには、まさに上述の点にある。

それに加えて、英語の音声的な面もその力強い簡潔さに貢献していることは否めない。これについてもこれまで若干は触れたつもりだが、やはり単語節語から成る本来のアングロ・サクソン語が口語英語の主役である。それらは子音が多いが、それ程ゴツゴツした響はなく適当に間に母音がはさまって調和のとれた音となっている。それと英語の単語は stress accent であり、更に rhythm や intonation の起伏が日本語のそれよりは大きく多様で、それが又日本語に有りがちな音の単調さから免れている。実際、例えば英語の人称代名詞をみれば一目瞭然だが、それらはその格変化の如何を問わず、すべて単音節語である。日常多用される動詞、Basic English で名高い C. K. Ogden (1889-1957) 博士の云う 10数個の motor verbs (come, lay, set, fall, look, stand, get, put, take, go, run, turn, etc. のことを指す)。もすべて単音節語から成る。更に英語では intonation の高低だけで、日本語の文章体の数語の働きにとって代わっている。これなども意外と気付かれていないが、英語口語体を簡潔にしている有力な一因である。最後に (last but not least)、日本語にどうしてもつきまとうて離れない敬語表現の多用が、英語では極めて少く、又その実体も日本語のそれとはかなり差異がある。この敬語表現からの自由が英語口語体の簡潔さと力強さに寄与しているところは最大である。

以上、色々の側面から口語英語の性格を日本語のそれと比較して考察して来たのであるが、何となく漠然とではあるが感じられていた「口語英語」の持つ魅力の一端が、上述の説明から若干でも解明されたならば、筆者の幸甚とするところである。およそ英語に限らず、如何なる言語においても、その真の生命力は文語ではなく口語体、口語表現にこそその民族の生々とした諸感情・意志が表わされているのであって、口語表現を抜きにした外国語の勉強ほど無意味、無乾燥なものはないであろう。だがこれまで、否今日でさえ、学校で用いられている英語教材の中味は、文語体、文章体のものが圧倒的に多く、生々とした簡潔で、明快な対話調（映画のシナリオなどによく見うけられる）のものは少く、誠に遺憾である。これでは一部生徒の折角の英語に対する興味も半減させてしまうのではなからうか。コトバは生きものであり、そこには人間の喜怒哀楽のすべてが表現されるものなのだ。それはどうしても口語体でなければ不可能に近い。英語を死語 (dead language) としてでなく、

我々と同じ生きた人間が日々生活の中でその必要に応じて使っているコトバとして捉え、その原点から、即ち口語英語に重点を於いた学習こそが望まれるところである。その言語の魂が口語表現に具現されているものだとすれば、口語英語の征服なくして、真に英語に通暁することも有り得ない。「仏作って魂入れず」と云うことばがあるが、口語英語のマスターなくして、単に文法訳読法による難解な英文の漢文読みは、正に上の「仏作って魂入れず」の愚行であろう。よく学校の英語の授業などで、発音・音読の練習は通り一遍で済ませ、早々に和訳に取り組む姿勢が散見されるが、この様な授業ならば何年英語を学んでも、遂に英語の何たるやを把握出来ずに終わってしまうであろう。コトバの基本は音であり、人間はその諸感情・意志を音に托して表現せんとしているのであり、そこよりして、音声面、更に生々した対話・会話体の口語表現を無視した語学教育などは存在し得ない筈のものである。この際今一度、「英語は生きもの」なのだとの至極当たり前的事实から出発し、口語英語の重要性を是非共見直したいものである。

話が少し横道にそれた様だが、この辺りで再び本題に戻ろう。「談話体」と云うのは普通最小限二人以上の人間が相對峙して、話しコトバによる face-to-face のコミュニケーションを行う際に用いられるコトバの様態のことを云うのである。その場合、その「談話体」なるものの様態はその対話に参加する成員の属する特定の社会や文化の型によって当然にも規制される。これを日本語について考えるに、その対話者間の性別、年令別、社会的地位の高低、公私の場面での役割の相違（例えば、「店員 vs. 顧客」であるとか、家族内に於ける「親 vs. 子供」、「夫 vs. 妻」、「兄 vs. 弟」etc.）、親疎の度合、上下関係等々諸々の要因に基付いた、それぞれの場面状況に「ふさわしい言葉遣い」なるものが複雑な発達の跡を見せている。謂ゆる「敬語」なるものはその典型例であるわけだが、その敬語にしても、例えば日本語と朝鮮語とではその様態・役割・用法と云った面でかなりの相違がある。その決定的な違いの一つは、日本語の敬語が謂ゆる「相對敬語」であるに比し、朝鮮語のそれは「絶対敬語」の方が優勢であると云える。従って例えば朝鮮語では自分の親について語る場合、「外向き」にであると「内向き」であるとを問わず必ず尊敬の意をこめた敬語を使用しなければならない。又妻が自分の夫について語る場合も、外向き、内向きの如何を問わず尊敬語を使用せねばならぬが、この様なことは、日本語の敬語は原則として相對敬語であるため、日本語では余り起り得ないのである（ただ日本語の場合も、地域によっては一部絶対敬語の使用されている所もあるやに聞く。近畿から北陸にかけての郡部に特に見られるらしいが、時代の流れと共にこれも急速に変化し行くもので、それこそ絶対的な事は云えない）。更にそれでは英語には敬語なるものは存在しないのであろうか。まさかそうでもあるまい。しかし英語に於ける敬語の様態・機能・役割と云ったものは日本語のそれらとは当然にも異なるのであろう。それでは具体的にどの様に異なるのであろうか。更に加えて、それでは中国語に於いてはそれらの諸現象はどの様な形で処理されているのであろうか？ 等々次々と疑問の種はつきない。例えば中国語に於いて「直呼其名」（名前の呼び捨て）と云う現象がある。この様な対人関係に於ける呼称の様態を問題とする時には、それらは正にその成員の属する文化や社会の現実の姿の反映に外ならない。中国人が「直呼其名」が出来る場合に、日本人ではそれが仮りに出来ないとするれば、それは日中兩國に於ける文化の差、対人関係のあるべき、ふさわしい姿に対する日中兩國民の認識・評価基準の違いとして説明さるべきものと考えられる。中国語に於いて、名前を知らない他人への呼びかけには、一般に「同志」が用いられる。相手の職業などがわかっている場合は、「老師」（学校の先生）や、「大夫」（お医者さん）などの呼称が用いられ

る。なお外国人に対しては「同志」を用いず、男女共に「先生」を敬意のこもった呼びかけとして用いる。

ついでに、この辺りで少し中国語で、特に人間関係における呼称がどの様になっているのか垣間見たいと思う。我々日本人が漢語を用いている限りに於いて、当然にも呼称の中に中国語のそれと共通のものもあるのではないかと想像される。ただ問題は解放後の中国においては特に呼称の内容とその用法とが解放前とも又日本語に於ける慣用ともかなりの違いがあると云う事実である。例えば日本では称号だけではならず、その後更に殿だの様だのをつけることもある様だが、中国語の場合はその様な必要はない。更に一般的に人の名前を呼ぶ場合、例えば姓が漢字で一字の場合に年上、目上の人に対して「老」をつけることがあるが、女性に対しては老はあまり使わない。年下の者に対しては「小」を使う。ところで姓が漢字で二字以上に亘る場合は、そのまま姓を呼び捨て（直呼其名）にしても構わない。姓が漢字一字の人に呼びかける場合は、姓名を揃えて呼ぶ。非常に親しい間柄の場合は名のみを呼び捨てにすることもある。勿論、中国語に於いても姓名の呼び捨ては親しい間柄では望ましいことであろうが、全くの他人や場合によっては年下や目下の者からの呼び捨ては好ましく思わない人もいるかも知れないのだが、実際には現代中国に於いて斯様な意味での呼び捨ても広汎に用いられているのであり、その辺りは日本語の場合と比較してははっきりとした相異が感じられる。

一般に中国語では尊称を表わす接尾辞は少いのに対し、日本語では非常に多く、使用頻度も又高い。日本人にとって見知らぬ人でも見知った人でも、余程親しい間柄でない限り「呼び捨て」には抵抗感があり、接尾辞をつけて呼ぶ傾向が強い。例えば厳密に云って中国語には日本語の「～さん」に当る様な呼称はないと云ってもよい。「先生」「同志」などがあるが、場合によっては、何もつけないで呼ぶ、つまりは呼び捨てにすることも少くはないのである。学校で先生が生徒を呼ぶ場合「同学」なる接尾辞を用いたり、運転手に呼びかける時などに「司機同志」などと云うことはある。更に夫婦間ではそれぞれの名(first name)を呼び捨てにして呼んでいる様であるが、この辺りは英語のそれと同様である。公衆の面前である人を呼び出す場合でも、現代中国では呼び捨てにしている様であり、日本人には抵抗感が残るところであろう。ただ見知らぬ他人の注意を惹く為に中国語で「同志」を老若男女の別なく用いる様だが、日本語にはその様な呼称はない。実際この「同志」は広く使われており、「～同志」と呼ぶのは勿論、手紙の宛名にも用いられる。

結論として、現代中国に於ける人間関係は日本や韓国に於けるそれと比べて遥るかにドライなものであり、従ってその呼称も日本に於ける程複雑な様態を見せてはいない。儒教的人倫関係の本家本元であった中国であるが、少くとも現代の解放後の共産政権下に於いては、その人間関係の様態は欧米のそれをも上廻る impersonal にして dry なものである様だ。

更に中国語には、日本語に見られる謂ゆる「丁寧体」と「普通体」の区別も原則的には存在しないと云ってもよい。つまり見知らぬ者同志が公の場所で会話を交わす場合も特別に「丁寧体」を用いることはない。殆んどの場合「普通体」で極めて卒直簡明に会話が交わされるのであり、この辺りも日本語のそれと大きな開きを感じられる。一般に格助詞を持たず、文法上の形態変化もない、単音節性の孤立語たる中国語は、それだけで言語学的に非常に簡潔平明な言語である上に、前述の如き現代中国に於けるドライな人間関係は、全体に中国語の談話体を日本語のそれは云うに及ばず、英語のそれをも上廻る簡潔にして明快なスタイルのものにしている。中国語の文法範疇を英語のそれと同一線上で考えられ

ないのは当然の事ではあるが、それはそれとして中国語の表現が日本語の表現は勿論のこと、英語の表現と比べてもなおかつ名詞集約性の強い表現形式を持った言語であることは疑い無いようだ。例えば中国語の“今天星期日，人真多。”（今日は日曜日なので、人が大変多い）の如き談話体の場合、特にそれを入れないと意味上誤解を招く場合を除いては、接続詞などは原則として用いられず、又「介詞」（前置詞に当るものと考えてよい）や、場合によっては動詞でさえも省略されることもある。更に中国語では原則として格助詞を欠くため、名詞が羅列されることが多く、日本語などに比し、機能語（function word）に依存する割合が低く、名詞を主体とした内容語（content word）本位の表現が可能となる。本来孤立語に属する中国語の syntax に於いて機能語の果す役割は英語や日本語のそれに比し大きくはないと云えよう。次に若干の実例を掲げて中国語談話体の特徴を垣間見よう。

(1) 有事，請告訴服務員。〔何か用事があつたら、服務員に申し出て下さい〕この場所、前半部に接続詞が省略されている、と云うよりも中国語ではこの様な場合普通接続詞は用いないと云うのが正しいのだ]

(2) 三天就可以取。〔三日もすればお受け取りいただけます〕客の質問に店員が答えている場面でも御想像願いたい。「三天」だけで「三日もすれば」の意を出しており、経過を表わす動詞は特に使われていない]

(3) 最近中国學習日語的人多起来了。〔最近中国では、日本語を勉強する人が多くなって来た〕この場合は、中国の前に介詞「在」を置いて「在中国」とすれば、「中国では」の意となるのであろうが、この原文では特に介詞は使われていない。「最近」は名詞の副詞的用法と考えられる]

(4) 現在早晚氣温变化比較大，請多加注意。〔このところ朝晩の気温の変化が割合に大きいですから、十分にお気をつけて下さい〕日本語でもそうであるが名詞を副詞的に転用する用法が中国語にも英語にもある。ここでは一見名詞の様に見える「現在」「早晚」「比較」等は中国語で副詞的に用いられているとみてよい。ただ「比較」については、日本語ではそのままの形では副詞にはなるまい。「比較的」とか「比較的に」とせねばなるまいが、その当りは中国語との違いが見られるところだ。更に「比較」は中国語では本来動詞であり、この点でも日本語では「比較する」の如くサ変動詞「する」をつけないと動詞にはならない。もっとも「比較」には名詞もあり、中国語で「做比較」として「比較する」の意を表わす名詞表現もある。後半部にある「加注意」も同様で、「注意」だけでも中国語では動詞なのであるが、「注意」を名詞にして「加」と組合わせて全体として「注意する」の意を出している。日本語でも「注意をする」と云えば「加注意」なる中国語の表現に若干近くなるかも知れぬ。同類の例をいくつか挙げておこう。これらはいずれも中国語に於ける一種の名詞表現とも呼べるものである。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| (i) 加以分析「分析する」 | (ii) 做報告「報告する」 |
| (iii) 有保証「保証する」 | (iv) 取得勝利「勝利する」 |
| (v) 得到發展「發展する」 | (vi) 作練習「練習する」 |

これらはいずれも中国語で名詞および動詞として使われている2音節語を、この場合は名詞（特に行為名詞）として用い、それに或る特定のあまり色のついていない（colorless）動詞と組合せたものである。この文例でも何か接続詞が抜けている様な感がするが、中国語の表現としてはこれでよいのであり、日本語の表現に比し、格助詞なども介在することなく誠に簡潔な名詞的表現とはなっているようだ]

(5) 初次来中国，印象如何？〔初めて中国に米られたわけですが、印象は如何ですか〕

やはり前半部に接続詞が欠けている感がある]

ところで中国人がその日常の会話の中で我々日本人から見れば如何に brusque で blunt な表現を用い、dry にして impersonal な人間関係の下にあるかを示す好例がある。普段余りにもクドクドしい「丁寧体」の表現や、ベトベトした人間関係の狭間に置かれた日本人からは想像もつかない中国人の communication のドライ極まる様態を垣間見ることにしよう。

実例[I] バスの車掌:「剛上来的, 買票。」

乗客:「我買張票, 去首都体育館。」

これは、いきなりバスに乗り込んできた乗客に対して、車掌が次の様に云っているのだ。直訳すると、「今乗ってきた人、切符買え、それに対し乗客の方は、「私は一枚切符買うよ、首都体育館へ行くんた。」勿論日本語では中国語の様な直截な表現にはいくら直訳してみても及ばない。所詮「翻訳者は裏切者」(Translators are traitors.) の諺の通りなのである。それはさておき、この様なヤリトリがすべての場合にバスの車掌と乗客の間で行われているわけでは勿論あるまい。例えば切符を買わずに乗り込もうとした乗客を咎めて車掌はその様な云い方をしたのかも知れない。それにしても日本で同じ場面を想定した場合、まさか上例の様な物云いとはなるまい。実際中国人の間ではこの程度のドライ極まる会話のヤリトリは別に珍しくもないのである。列車の車内販売員が乗客に対してジュース類を示しながら、「要不要?」(中国語で云う選択疑問文である。中国語でも選択疑問文を用いずに、要嗎? とか更には要? だけでも同様の質問が為し得るが、さすがにこれでは余りにも直截に過ぎる。一般に選択疑問文の方が「嗎?」なる疑問の助詞を用いた文よりは formal ではある。)と問うているのに対し、乗客の方は一言「不要」と素気ない返事をしていいる。これを直訳してみると随分とヒドイものである。つまり車内販売員が「要るか?」と問うているのに対し、乗客の方は「要らん」と一言答えているだけで、日常過剰なまでの丁寧語に囲まれて暮している日本人からすれば全く想像もつかぬ brusque 極まる物云いである。更に駅などで切符売り場の窓口でのヤリトリも、とかく評判の悪い、日本の国鉄職員でも、中国に於ける様な物云いはすまい。中国の出札係が“去哪儿?”(何処へ行く?)と問うているのに対し、客は“去大連”(大連へ行く)と答えている。両者の間に一切の丁寧語も敬意表現も用いられていない。必要な情報の交換だけが極めて直截に、一切のムダな物云いもなく、全く businesslike に行われている。日本人などには到底この様な冷たく突放した様な物云いは出来ない筈だ。御承知の如く、我が日本では社会生活の殆どすべての場面で、謂ゆる「デス・マス体」が用いられている。最近耳障りなもの一つに、特に子供などが、「デス」や「マス」の部分に変に力を入れた妙なアクセントの発音があるが、あれなども日本語の「丁寧体」だからこそ起ることで、例えば英語や中国語では起り様もない現象と云えよう。例えば何かの面接試験の場面などで、住所、氏名、年令等々を聞かれているとして、日本では云うまでもなく質問者も答える側の人も先ずは必ずと云ってよいほど「デス・マス体」を用いるであろう。しかし英語や中国語では如何であろうか。例えば英語に例をとると次の様にならうか。

Q: Name? (お名前は何とおっしゃいますか?)

A: Nash, Frank Nash. (ナッシュ, フランク・ナッシュと申します。)

Q: Address? (どちらにお住まいですか?)

A: Sunset Strip 77. (サンセット通りの77番地に住まって居ります。)

Q: Age? (お年はおいくつですか?)

A: Thirty-four. (34才でございます。)

少し大げさに誇張し過ぎたかも知れぬが、そんなに間違ってもいけないのではないか。大英米人は上例の様な名詞だけを投げ合う様な簡潔な会話のヤリトリを好み、日本人の場合、御覧の通りの冗長極まる style となっている。海外旅行などでの機内アナウンスが日英両語で行われるのなどは日英語の表現比較の為の好例となる。「日本航空 803 便にお乗りのお客様、お席におつきになりましたら、お坐席の安全ベルトをおつけ下さいませ。」いや全く「参った」と云う感じだ。ヤタラと「お」だけつければよいとでも思っているのだろうか。とにかくこれに限らず、日本での公共サービス機関でのアナウンスメントの冗長さには誠に辟易させられるものがある。日本でも最近では、特に若者達が敬語を使うことが少なくなったと云われているが、それは尊敬語や謙譲語についてのみ云えることで「丁寧語」は逆にその使用が増えているのではなからうか。これにはマスコミの発達や商業主義の影響も大きいと思われる。次に更に中国語のドライな会話の一端を見てみよう。

実例〔Ⅱ〕「別動，看我，好！」（動くな，私を見ろ，それでよし！）

これはカメラマンがお客に対し、写真を撮る前に色々とその姿勢のことで注文をつけている場面を御想像願いたい。上の直訳の日本語ではそれこそ日本語にならない。意識すれば、「どうぞ動かないで下さい。私の方を見て下さい。はい、結構です。」とでもなるか。似た様な例を英語に求めると、“Sir, take a look at this.” これは下級船員が上司である艦長に対し潜望鏡の中を覗き見る様要請している場面なのだが、Sir と目上の者に対して敬称を用いているのはよいのだが、その次に“take a look at this”（ちょっとこれを見ろ）の如く生の命令形の動詞をそのまま使っている。この命令形を生で使うやり方は上例の中国語の場合も英語と全く同様である。日本人の感覚としては、目上の者はおろか、目下の者に対してさえ命令形をムキ出しの生の形では使えまい。

さてこの辺りでもう一つドライ人間の極めつけとも云える例を英語の中に求めてみたい。Irma なる女性が、強盗がアパートに侵入する現場を目撃し、警察へ 110 番（実は英語では 911 番になっているのだが）する。そこでの警察官との会話のヤリトリの場面なのである。

Irma dialed 911. A voice answered, “Nine-one-one, Police Emergencies. Can I help you?” “Yes,” she replied. “I’ve just seen a robber climb into the apartment over Pantoja’s Grocery Store on Harlan Avenue. Send someone quick.”（イルマはダイヤル 911 番を回した。「警察用緊急電話 911 番です。どうかしましたか？」と云う声が返ってきた。「え」と彼女は答えて次の様に云った。「ハーラン通りにあるパントーヤの雑貨店の上のアパートに一人の強盗が押入るところを目撃したんです。だれかすぐに寄越して下さい」）どうも日本語に訳して仕舞うと原文の迫力が骨抜きになって気が抜けた様な感じだ。最初の部分の“Nine-one-one, Police Emergencies.” のところは例によって名詞を投げつけるだけの形をとった「名詞表現」となっている。だがここでの問題は最後の Irma なる女性が応待に出た警察官に向って生の形の命令法で Send someone quick. と叫んでいる箇所である。確かにこの場合は緊急事態であることを割り引いて考えねばならぬとは云え、やはり女性が、それも相手は警察の人間であるのに「誰れかすぐに寄越せ」などと叫ぶ様は、如何にも我々日本人とは文化伝統を異にする英米人ならではの痛感させられるのである。日本語の動詞にも当然命令形があるわけだが、実際には日常会話に於いて英米人が気軽に命令形で物を云うところを、日本人には命令形を使うことに抵抗感があると云う場面は数多い。否それどころか事実上我々日本人は命令形などは余程の場合でない限り滅多に

これを使用しないのである。命令形はおろか、終止形でさえも我々日本人には馴染まないのではなからうか。つまり普通我々は生の形の終止形で断定的に「云い切る」ことはなくて、丁寧体の動詞、補助動詞、助動詞、更には各種の助詞などを用いて、文末を云い切らずに「含み」を持たせる。更に連用形の中止法や、接続助詞の多用も、実際は文を「云い切る」形の終止形が使いにくい為に起ってくるのである。文末は出来れば濁して何を云っているのか解らない様にしておいた方が無難なので、そこより各種の助詞を用いて婉曲に「余韻」や「含み」を持たせておく。これなども結局は、西洋人や中国人に比して遥かに複雑で窮屈な人間関係の狭間に住む日本人の生み出した苦肉の策でも云えるものなのであろうか。智に働いて角の立つ表現をするよりは、情に棹さしてでも白黒をハッキリさせず玉虫色の表現にして、何となくアイマイな形で話を終えてしまうのに、接続助詞や終助詞が必要以上に使用され、命令形はおろか、終止形で文を終らせることすら出来ないものである。

ところで今でこそ動詞の終止形と連体形とが同じ形をとっているが、平安朝の頃はまだその区別が存在した。しかし終止形で文を「云い切る」ことへの抵抗感から、連体形を終止形の代用として使用している中に終止形は殆んど使われなくなり、結果として今日に於ける如き、終止・連体同型の語尾を持つものに定着したのであろうと思われる。(断定の助動詞「だ」は、終止形と連体形の活用形が異なる唯一のものである。その点形容動詞も「～だ」の型で終り、やはりその連体形「～な」とは活用形を異にする。ただ形容動詞と云う品詞を認めず、それを『名詞+断定の助動詞「だ」』とする説もあり、或いはその様な説には異論を説える者も多くあり、ただここではその様な議論のあることだけを指摘しておくに止める)

ところで日本語の敬語の歴史はすでに万葉の昔から始まっており、上代日本人も上下の身分関係、TPOに基づく人間の「待遇表現」に極めて過敏な反応を示したのであり、日本語に於ける敬語の歴史は正にその国語史と共に始まると云ってよい。朝鮮語に至ってはその対人待遇法に「丁寧体」として、上称・中称・等称があり、「普通体」として下称があり、日本語と比較しても更に複雑な様相を見せる。いずれにせよ、英語では人の呼称関係を除いて、謂ゆる敬語や敬意表現が比較的には稀少であるのに比し、日本語・朝鮮語に於いては、それらは質量共に非常に複雑で多彩な発達の跡を見せている。中国語も本来は敬語の多い(少くとも語彙的に見て)言語であったが、解放後の新中国の社会体制の下に於いて、即ち、「現代の中国語」に於いては、敬語の使用がさほどのものでないとするれば、その原因は奈辺に存するのであろうか。考えられる有力な一因としては、元々中国語には、日本語や朝鮮語に於ける如き体系的な敬語構文法が存在しない為であり、更には旧中国に於いて存在した諸々の敬語が、解放後の共産主義政権下に於いて大幅にその姿を消さざるを得なくなったことであろう。中国語に於ける敬語語法の中心を為すものは対人間関係の中に於ける「呼称」にあり、その点でも、呼称のみならず、その他諸々の相に於いて複雑な敬語表現が用いられている日本語、朝鮮語の場合よりは余程簡易なものであると云える。更に中国語自体が文法的な言語であるよりも、ヨリ語彙的な言語であることを反映して、中国語に於ける敬語も文法形式、構文法の中での敬語表現よりも、語彙そのものの中での敬語が数多く存在し、特に旧中国の支配層の間に用いられた挨拶用語などにその典型を見ることが出来る。ところで、日本、朝鮮半島、中国の三地域に亘る敬語の様態を比較検討する(例えば韓国と北朝鮮とでは社会体制の相異を反映して、当然にもその敬語の様態も若干の相異を見せているものと思われる)十分な余裕はとて無かったし、又それが本論

文の主要テーマでもない。それらの事に因しては次の機会を待ちたい。いずれにせよこれまでは英語に於ける、特にその文章体の中での名詞表現なるものを、その複雑な諸相を見せる数多くの例文を掲げながら分析究明して来た。併し同時に筆者の関心は、日本語に於いて何故に一般の普通の文章表現や日常の談話体の中に於いて、謂ゆるここで云う「名詞表現」なるものが比較的には少いのであるかと云う事に存する。その事実については若干触れる箇所もあった。例えば日本文の基本文型は英語流の文法カテゴリーを適用させてもらうならば、「S+V」なり「S+C+V」型であり、文構造として既に「用言止メ」であって「名詞止メ」には成り得ないと云うのであった。更にそのことに加えて、仮りに「体言止メ」が可能な場合に於いてすら、例の日本語特有の「丁寧体」の文体がその邪魔をして中々体言で文を終ることがむずかしいと云う事であった。しかし、日本人同志のコミュニケーションに於いて、すべての場合において、いつも「普通体」、「丁寧体」のみが使用されているわけでもあるまい。もっと内輪同志のインフォーマルな会話の中では、省略されるべき語句はどんどん省略されて、例の文末に来る「デス・マス」は勿論のこと、文末の動詞なども省略される場合も往々にしてあり得る。従ってその様な場合では日本語において「体言止メ」は起り得るわけである。ここで筆者はこの様な形でのコミュニケーションに使用される文体を、筆者なりに仮りに「内輪体」と名付けた。而してこの「内輪体」に於いて省略されるのは必ずしも文末に来る「デス・マス」や、主語、動詞その他の文の成分ばかりではない。筆者が特に興味を以て観察しているのは、その後置詞としての性格を持つ助詞の省略である。更にその助詞と云った場合も、特に「格助詞」と「終助詞」にその省略が顕著に目立つ様である。「内輪体」の場合、話し相手に対する「遠慮」、「気兼ね」と云ったものは一切ない。勢い、言葉遣いはくだけた、loose なものとなり、出来る限り短い文章で表現しようとする結果、格助詞は省略され又人間の諸々の複雑な情緒・感情を表現する終助詞もやはりその使用頻度は落ちる。それらに代って、日本語では比較的にその役割が重要視されていないイントネーションや、リズムの緩急、強弱のアクセント、文強勢等の音声面の比重が増し、声の調子や顔の表情、手や身体全体の所作に頼る傾向がずっと強くなる。つまり「生の感情」を強く適確に迅速に伝えんが為には、本来は附属語である助詞などは「文の成分」ですら省略される場面では、当然にも省略されることになる。つまりこれを専門的な用語で言えば、助詞を用いる verbal communication の部分が、人間の声の調子、顔の表情、身体諸器官の仕草などのヨリ non-verbal な communication へと移行し行くものと云える。つまり日本語だからいつも助詞がなければ会話が成立しないと云うことにはならなくて、つまりヨリ格式ばった、フォーマルな表現になればなるほど、助詞に限らずその他の語句が必要となってくるのである。この事は何も日本語に限ったことではなく、表現が丁寧で格式ばるほど文章が長くなることは何語に限らず一般的に云えることである。この事から一体どう云うことが云えるのであろうか。日本語に於ける格助詞の存在、更に終助詞および間投助詞の多用（補助動詞・助動詞に依る敬語表現については云うまでもない）などと、日本人のコミュニケーションの様態とに何等かの相互連関が存するのではなかろうかと云う疑問である。勿論すべての場合に於いて格助詞がすべて省略出来るなどと云う積りは毛頭ない。併し格助詞がなくても文意に何らの相違も生じない場合が多々あることも又反面動かし難い事実である。この事は終助詞については更にもっと明白な事実として云い得る。ただ日本人がそのコミュニケーションに於いて一般に断定的な言い切る形で文末を終るのをきらい、「含み」「余韻」「余情」「暈し」を持たせた形で文を終ることへの嗜好癖を有する限りに於いて、ますます多くの終助詞や、

間投助詞、更には接続助詞が必要となってくる。而してこの様な附属語や、敬語などに依存しつつ、なるべく人間の「生の感情」を直截に表現することを嫌う結果、どうしても日本人の言語表現の様態は、文章そのものを出来る限り様式化する、それも内容語 (content word) と云うよりも、むしろ機能語 (function word)、日本語文法で云えば助動詞・助詞の様な附属語の多用に依存しながら文型式を完結させようとする。従って当然にも、コミュニケーションの現実の場に於ける生きた人間の声調、アクセント、リズム、イントネーション、更には顔の表情、感情の起伏、身体の所作等々、談話行為を側面から援護すべき諸要素が英中両語などに比しその発達が不十分である、と云うよりもあまり重要視されていない。それどころかむしろ必要以上にそれらを強調したりすると徒らに反撥を招きかねない。その様な国民性を有する日本人の communication の様態はどうしても「丁寧体」へと傾き易い。ところで先述の如く、いくら formality を尊重する日本人であっても、すべての time, place, occasion に於いて四六時中緊張を持続出来る筈のものではない。従って特定の in-group に属する成員同志の間に於いては、謂ゆる筆者の云う「内輪体」を用いて談話を行うのである。ただいくら「内輪体」と云っても、それが英中両語に於ける様な談話体の style と全く同じ様になると云うものでは勿論ない。日本語には日本語としての固有の言語学上の制約が存する。例えばいくら助詞を省略することがあるからとて無制限にそれが行なわれるわけもない。而して格助詞を使う限りにおいて日本文の表現はどうしても述語部分に重点がかかる。例えば幾つかある格助詞の中で「が」や「の」を除くと、後のものはすべて連用修飾語として働き、用言中心の表現形式を形成せざるを得ない。語順などもいくら「内輪体」だからとて基本的には変えるわけには行かない。やはり periodic order をとる日本文としては「用言止メ」が基本とはなろう。更にそれ以上に日本語の音韻・音声組織そのものが果して例えば強い感情の表出に向いているや否やの疑問もないわけではない。中国語が単音節の性格を強く持った言語であることはよく知られている。極端な云い方をすれば中国語のすべての単語は monosyllable であるとも云える。何となれば中国語にある 2 音節語、3 音節語もこれを分解してみればそれぞれ単音節語に帰するのである。ところで英語の方も特に Anglo-Saxon 語は単音節語から成るものが非常に多い。而して日常談話体の中に表われる語は圧倒的にこの Anglo-Saxon 語が多く、特に文章の最も重要で根幹の部分となす語にこそこの Anglo-Saxon 系の単音節語 (monosyllables) が多く見出される事実が存する。単音節語こそは強い感情を表現するのに最適である。しかも英語の場合その単語は原則的に閉音節であり、特に k, p, t 等の破裂音は強い感情の表出に最適の語音であるといえる。更に格助詞を欠き、名詞の羅列や、名詞中心の表現を多く持つ英語が強い感情の表現に非常に適した言語であることはもはや疑う余地はない。中国語も日本語などに比べると、遙るかに強い感情の表出に適した言語であると云える。何と云っても中国語にある数多くの単音節語と、やはり格助詞を欠く構文法から語と語が直接結び付くことより文全体として緊張感が保たれる。しかし中国語の場合も日本語と同じくその単語は原則として閉音節であり、その点英語と比べて語音に弱さが感じられる。更にアクセントの点からも英語の stress accent に対し、日中両語のそれは原則的に pitch accent であり、その面でも英語に見劣りする。一方日本語は何と云っても多音節語が大半を占め、極めて母音過多の言語である。どう見ても強い感情の表出には不適である。この事はその閉音節、高低アクセント (pitch accent) は云うに及ばず、構文法の面からも各種の助詞の使用、用言中心的表現法更には日本語に特有の敬語及び敬意表現 (honorifics & honorific expressions) 等々と相俟って、どう見ても日本語と云う言語は強い感情表現には

適していない様だ。日英両語の感情表現の違いとして色々その他にもあり得るわけだが、例えば文の種類と云う点から、その感情表現が疑問文となっているか、それとも否定文か、それとも肯定文なのかと云った修辞法の問題もあり得ることを指摘しておく。更に同じ様な感情表現を行なおうとする場合、文型式をとるか、それとも何か副詞的な語句を用いるか、或いは間投詞でズバリ表現するか等々、特定の言語に於いてそれぞれその処理の仕方が異なることは容易に想像される場所である。とにかくこの「感情表現」の分野こそは日英語の相違が最も顕在化しやすいところと云えるのである。

最後に今日の日本人の談話形式の謂わば原型 (prototype) と云える王朝時代から大宮人や都人により伝えられてきた「京コトバ」なるものに対する筆者なりの卒直な印象を述べてみたい。つまりそこで行われている様な communication の様態こそが現代に至るものお代表的な日本人の物云いの実体なのであり、それらを支えてきた大宮人や都人の mentalityこそが、日本語の談話体をして英中両語に於けるそれと大きな距りを生じさせた決定的な要因と見られなくもないのである。では早速その印象の幾つかを挙げてみよう。

- (1) とにかく前口上が長すぎる。話の途中でも、盛んに弁解しないと話が先へ進まない。これは発言にこだわり過ぎると、他人の存在への異常な気配り（と云うとよく聞こえるが、実際は他人への警戒心である場合が多い）の故である。
- (2) 意味のない形式的な物云いが多い。換言すれば、冗長 (redundant) で虚飾に満ちた表現が多い。これなどは英中両語における単刀直入な物云いとは対極に位置するものと云えよう。これを都人の「遊びの精神」とでも云うのか？
- (3) 何を云っているのか真意を測りかねる物云いが多く、当事者双方の側での疑心暗鬼を生む原因ともなる。仮りに本気で相手に問いただすと「察し」の悪い奴とばかり「野暮天」扱いされることは必定。モテるのは「粋な人」なのか？
- (4) 平身低頭ぶりが目立ち、相手の顔などもまともに見ることもない。現に日本では西洋流に相手の目を見つめて話しなどしようものなら、相手側は落ち着かない気分になることは間違いない。例の「低姿勢」(low posture)に出ておくのが一番無難なのであろう。事大主義と事なかれ主義の素地がここにある。目と目は物言わぬのである。
- (5) 突りなき対話が余りにも多い。口先きだけでただ儀礼的に物を云っていると云う印象は拭い難い。インギン無礼 (benign neglect) を地で行く感がある。これを大宮人や都人の “sophistication” と云うのであろうか？
- (6) 面子にこだわり、体面を重んずるのあまり、人間らしい生の感情が出せず、卒直な話し合いは不可能となる。「ウチ」と「ソト」を巧みに使いわけ、そこより「ウチワのことば」と「ヨソユキ言葉」の double standard が生まれてくる。複雑な「物云い」の生ずる所以である。
- (7) 物を云う時はいつも「構えた」云い方をする。冗談などの入り込む余地もない。もう少し相手を信用して relax した雰囲気の下で真情を述べた方がよいのではないか。だがそうすると田舎者となる。「丁寧体」の氾濫の素地がここにもある。
- (8) 口の中でボソボソ、特に文末は濁して相手にそれと悟らせない。断定的に云い切らない。文頭も何を云い出すかは、はっきりさせない。国会答弁はその現代版。
- (9) 言質をとられることを恐れるのあまり、歯切れの悪い言い回しが多く、やたらと切れ目のない文がダラダラと続く。連用形中止法や、接続助詞が盛んに活躍する。間投助詞などの使用も必要以上に目立つ。中国語で言う「令人着急的」とはこの事か？
- (10) 底意地の悪い (イケズ)、陰湿で根暗な性格を思わせる持って回った誤解を招きかね

ない云い回しが多すぎる。ヨソ者にはとても理解しにくい「閉ざされた言語」との印象はやはり拭えない。巷間言われる日本人の外国語ベタの遠因をここにも見る。

以下まだまだ「京コトバ」や都人 (Kyotoites) のコミュニケーションの様態を表わす特徴はあると思うが、一応この辺りで終えることにしたい。それこそ都人 (Kyotoans or capital-dwellers) から少しケズ過ぎるのではないかとの批判も聞えて来そうだが、しかしこれは別に「京コトバ」を使う「みやこびと」に限ったことでなく、現代の一般の日本人全体について、「当らずといえども遠からじ」なのではなからうか。実際日々の生活の中で、以上十項目のどれか一つや二つは経験しない人はあるまい。必ずや思い当たる項目がある筈だ。否それどころか、以上の項目のどれもが実際には日本の社会での「生き残り」(survival) の為の必須条件、平たく云えば「処世のチエ」とも云い得るのではないか。尤も同じ人間である限りに於いて、英米人や中国人が上述の十項目のいずれをも免がれているなどとは云わぬ。程度の差こそあれ、社会的存在としての人間が群れをなして集団生活を強いられる限りそこより生ずる複雑な対人間の利害関係を処理する為の人間一般の持つ弱点 (或いはチエ?) なのかも知れぬ。現に英中両語に於いても敬語や敬意表現が皆無である筈もなく、又それなりの婉曲表現 (euphemism) も日常談話体の中で使用されてもいる。ただ筆者の云いたいのは、それにもかかわらず (敢えてそう云いたいのだが)、現実の日本語に現われた談話体の様態と英中両語に於けるそれとの差異はやはり余りにも大きい。例えば命令形は云うに及ばず、終止形 (文を云い切る形と考えてよい) でさえもが、その生の形のままで使用され得ない日本語の談話様態と、それらが何のこだわりもなく自由に使用される言語を持つ談話様態との差はやはり大きい。更に文法で云う謂ゆる「一語文」(one-word sentence) なる表現も、日本語には馴染まないと云ってよい。それにはやはりその様な「一語文」では敬意表現が不可能に近く、又文を「云い切る」形となり易く、更に命令口調に響く場合も多い等々の理由からであろう。つまり日本人の communication にとって top priority を占めるものは、実は正確にして迅速なる「意志の疎通」や「情報の交換」などではなく、己れの「分限」をよくわきまえた上での相手に対する「配慮」なのであり、その様な立場からすれば、場合によっては事実や伝えたいと思う情報を敢えて一部歪めてでも相手に迎合しかねない。従って非常にアイマイな表現が多くなる所以であり、又誤解や「思い込み」の多く発生する理由ともなる。よく外国人が日本人社会の中での「会議」の多さに言及しているが、直截に物云えぬ日本人にはそれなりの御繕立が色々とならねば、それだけ決論を出すのに手間ヒマがかかるのであろう。これらを総合して考えてみるに、要するに日本人はその社会生活に於いて、各人はそれぞれ先天的・後天的に定められた「分限」に基づいて行動し、又その分限にふさわしい「言葉遣い」が頑くんに守られ、つまり様式化された生活が同じく様式化された「言葉遣い」を生んでいるのである。この「様式化」(stylization) なるものは、当然にも各個人の自由にして卒直なる感情表出とは相容れぬものである。人間の本来持っている強い「喜・怒・哀・楽」の感情もその表出の様態と云う段階になると、日本語の様な性格の言語では極めて紋切型 (stereotype) の無表情なものとなりやすい。この「紋切型」と云うのは、様式化された物云い (stylized phraseology) と云うことで、上述の「一語文」などでもなければ、名詞を主体とした短い語句から成るでもなく、動詞・補助動詞主体の上に附属語としての各種の助詞・助動詞の多用より成る文章完結型のそれである。これを分り易く云えば、日本語に於ける感情表現と云うは、卒直な感情を短い語句の中にこめて強く発話すると云うよりは、一旦それらを紙の上に写し取って然る後に文章体と化したものを再度朗読すると云った観がある。更に「無表情」と

云うは、音声的 (vocal) な側面から見た場合、アクセント、イントネーション、リズム、ストレス、更に声音・声の表情等々の面で極めて抑揚に乏しく、一本調子であることだ。尤も先述の如く、日本語に於ける感情表出の様態は文章を朗読している様などころがあり、従って特別に強い起伏に富む、表情豊かな発話が望めぬとしても当然なのかも知れぬ。この間の事情を最も雄弁に物語る例としては、何れかの競技などで優勝した選手に放送記者などがマイクを向けて interview している場面で、聴衆の側は何か感激に充ちた強い言葉が発せられるものと期待していたところ見事に裏切られる羽目となる。つまりその優勝選手からは何らの短く強く鋭い、表情豊かな発話などなされず、イヤに取澄ました感じの長たらしく無表情な文章がまるで教科書でも読む様な調子で発せられるだけなのだ。（例えば角界の力士などにその典型例を見る。）しかし選手や力士ばかり責めるわけにもゆくまい。実際、日本語でその様な場面に英中両語に於ける如き直截で表情豊かな感情表出などムリな話なのだ。勤くとも、日本人はその長い歴史の過程の中でその様な直截な表現は発達させ得ないで来た。それには勿論それなりの理由がある。日本人の持つ独得な mentality やそこより生まれる「分限」意識の異常なまでの強さ、農耕民族の持つ閉鎖性や非社交性等々挙げて行けばいくらでも切りはない。更にそれらの non-verbal な理由の外に、勿論日本語に固有の、つまり verbal な側面がある。膠着語としての性格上どうしても附属語の使用が多くなり、その為例えば孤立語である中国語に於ける如き内容語 (content word) と内容語とが直接附属語を介さずに直結されるなどと云う現象も起りにくい。又例えば英語に於ける如き屈折語尾変化に依る格変化もムリで、やはり格助詞を体言に接辞として付着させねばならぬ。更に音声面での表情の乏しさを補うものとしても附属語が日本語に於いて多用される。その他日本語と英中両語に於ける communication の様態比較は色々な角度から為し得るのであるが、その若干の相違点についてはこれまで触れてきた通りである。勿論十分な説得力を持った説明が為されたか否かについては自信がない。何しろ問題は余りにも広く深く、日本語は母語として当然の事ながら、英中両国語の十分な master なしには満足のゆく相互の communication 様態比較など為し得るものではない。ここではそれらのほんの一端を覗き見たに過ぎず、今後は特に音声アクセント面での比較研究は欠かせないところだ。何故ならコトバの原点はやはり「音」そのものにあるからである。

Ⅲ. 英語「名詞表現」諸例（Ⅲ）

ここでは特に日常交わされる「挨拶語」、親疎を問わず人と人との間に於ける「呼称」、人間の喜・怒・哀・楽に関した「感情表現」、更に日常会話の中での簡単な「口語表現」などの様態が英語に於いて如何様になっているかをその「名詞表現」と云う視点からこれを考察してみたい。更にそれら英語に於ける colloquialism の様態を日本語のそれとも実例を通して比較を試みたい（必要とあらば中国語のそれとも）。実は「名詞表現」と一口に云っても色々な「相」があり、又色々な捉え方もあることはこれまで何度も繰り返し述べてきた。しかしここでは特に日常の「挨拶語」や、人の「呼称」、人間の感情の起伏がモロに現われる「感情表現」などを中心にその例を見ようと云うのであるから、必然的にそう長い文型式のものは少い。名詞ズバリ一語を投げつける型のものから、せいぜいその前に形容詞などがつくものが多い。ただ実際には英語の「感情表現」には、日本語では附属語を使用したり、形容詞・副詞的修飾語を用いている箇所を「文型式」としているものも少くはないのだが、ここではそれらの例は割愛させて頂く。ただ「感情表現」をはじめ、「挨拶語」や「呼称」にしても、これらはすべて人に向けて直接に投げつけられる表現なの

であるから、その表現は「短く鋭い」(compact & incisive) ものでなければ効果はない、その際にはどうしても名詞の持つ属性が最適のものであろうし、そこより簡潔で鋭い punch の効いた「名詞表現」が登場する所以のものであろう。

(1) Good morning. 「お早うございます」これは挨拶語の筆頭にふさわしい表現だと思いが、例によって英語では形容詞を伴った名詞が投げつけられるだけで、更に「名詞止め」となっている。日本語の方は「お」と云う接頭語に、「早う」は「早く」のウ音便化したもので形容詞「早い」の連用形であり、「ございます」は「ござります」のイ音便化したもので、元々「ござる」なる動詞（「居る」や「ある」の敬語）の連用形が助動詞「ます」に接続して出来たもので、結果として「ござる」の丁寧語となっている。とにかく丁寧語が2重・3重に overlap して使われている正に「バカ丁寧」(overpoliteness) としか云い様のない典型的な日本語的表現である。因みに中国語では「早！」と形容詞一語で足りる。「お」も「ございます」も何処かへ吹っ飛んで仕舞う。日中両語に於ける表現様態の差ここに極まれりと云った感がする。英語でもよく Good の部分は省略されて Morning! と云う事も多く誠に簡潔そのものである。日本語でも「お早う！」とだけ云うこともあるが、例によって上下関係、親疎関係が絡まって、どうしても「ございます」を添えねばならぬ場合が多い。英中両語に於いては対話者間の上下・親疎関係にそれこそ関係なく、誰れに対しても常に同じ表現が使用可能である。これは何も Good morning, や「早！」にだけ限ったことはなく、殆んどすべての「挨拶語」について云えることで、やはり日本語の表現の特殊性が窺い知れる好例であろう。ただここで一言断っておきたいことがある。実は先程「早」について形容詞であると云ったが、中国語の「早」には日の出のころ、つまり「朝」を意味する名詞的用法もある。辞書によれば挨拶に用いる「早」は特に品詞区分は書いてなく、「挨拶語・応待語」とだけ記している。若し仮に「早」を名詞と解釈しその意味を「朝」ととれば、英語の表現と同じ様になる。ただ中国語の文章体の中では“good morning”を「早安」と訳している様である。ところで中国語は形態変化を殆んど持たず、その品詞区分もアイマイなものが多い。英語についても若干その様なことが云えなくもない。日本語の場合は比較的品詞区分はハッキリしている方だが、それでも形容動詞を一個の独立した品詞として認めるや否やについての論議はある（例えば謂ゆる時枝文法などは形容動詞と云うよりはこれを名詞に助動詞「だ」がついたものとして解釈してみる観方も提案している様だが、しかしこれにもそれなりの難点はある様だ）。いずれにせよ、品詞の捉え方そのものや、その区分についてはまだまだ未解決の問題も多く、更に各言語間のそれぞれの特殊性が加わりその問題を更に複雑にさせているのが現状である。ただここではこれ以上品詞論には深入りしないが、それにしてもこの様な簡単な日常の挨拶用語の云い方にも日英両語間、更には中国語も加えて、それぞれにその様態を異にするのは興味深く、単に言語学上のと云うよりは、非言語的要因も働いてその表現様態に差の出てくるところが特に筆者などには興味深いところだ。

(2) Cheers! 「乾杯！」中国語では「干杯！」と書く様だが、問題は又しても品詞をめぐる厄介な事態に直面する。まず日本語の「乾杯」だが、勿論これは中国から来た謂ゆる漢語表現であり、これに当る大和コトバの成語は特になく、云うとすれば「サアみんなで杯を飲み干しましょう」と文型式にでもするしか方法はあるまい。日本語のこの「乾杯」は日本人の感覚としては名詞の様に響く。このことは実はこれに限ったことでなく、漢字2字から成る行為名詞（例えば、「注意」「練習」「工作」「斗争」「解釈」等々）も日本語ではすべて名詞扱いとなろう。そしてこれを動詞化するためにはサ変動詞の「する」をそ

の後につけて「注意する」とか「練習する」の様にするのである。つまり日本語としてはあくまでもこれらの2字漢語を名詞として捉えているため、どうしても「する」をつけないことには動詞としては使えないのだ。ところが中国語ではこれらの語は本来動詞なのであり、又その様に動詞として用いる方が圧倒的に多いのである。ただ厄介な事に名詞としての用法もあり、その場合はその前に「做」なり「作」を置いて動詞と同じ意味を出そうとする。さて話を元に戻して、中国語の「干杯」であるが、これもどうやら動詞であるようだ。とすると日本語の「乾杯」も元の中国語の用法に戻せば動詞と云うことになる。しかし日本語としては「する」がついていない漢語2字の語はどうしても名詞としか響かないし、又そのまま動詞にはまず使えなからう。尤も日本語でも「乾杯」を仮りに訓読みしてみると、「杯を乾す」となって名詞性が薄れ、動詞的性格が前面に強く出てくる。それはそうと、先程中国語では「干杯」は動詞だと云ったが、それは辞書を見る限りにおいての話で、更に又「為世界和平干杯！」と云った様な文脈に於いての事で、ただ「干杯！」とだけ叫ぶ場合は如何となると又問題も出てこないわけではない。いずれにせよ、一字・一音・一声・一意味からなる単音節性の孤立語たる中国語の品詞区分は誠に困難を極める。一筋縄では行かないと云うのが卒直な実感である。ただ筆者にとって興味深いことは、日本人が外国語を自らの言語体系の中に組入れる際に、漢語に限らず、カタカナ外来語の場合でも、本来のその国の言語の中での品詞区分に関係なく、すべて名詞と云う形でしか日本語の中では機能しないのではないかと云う事実である。例えばカタカナ外来語にその例をとれば、「エンジョイする」だの「ブルーの背広」だのと云う時の「エンジョイ」や「ブルー」は日本語としては名詞扱いであろうが、本来の英語の中では、それぞれ動詞であり形容詞である。（更に「Nowい服装」や「Nowなディスク」などの場合は、前者のNowは形容詞の語幹であり、後者のNowは形容動詞の語幹と考えられる。中国語の動詞は原則として形態変化しないのに比し、日本語の動詞は活用変化するものだから、漢語の動詞に更に「する」と云うサ変動詞をoverlapさせて、それで何とか漢語の動詞を活用させることが出来たと云う事なのであろう。ただ気になるところは日本語で何故「乾杯しよう！」とならずに「乾杯！」だけで終わっているのだろうか（勿論「乾杯しよう！」の様に動詞化して云うこともいくらでもあり得るが）。これはやはり中国語の「干杯」の音だけをそのまま借りて云う結果に偶々、と云うよりはこの様な短い呼びかけ語として使う場面であるため、そうなったのかも知れない。この事に関連した問題は論じあげて行けばいくらでも出てくるが、切りがないのでこの位に止めておく。さて肝心の英語のCheers!であるが、これは勿論名詞である。似た言葉にCheerio!などもある様だ。更にBottoms up!と云う表現もあるが、これはupと云う語がついて全体としては名詞表現と云うには少し弱い。「名詞止め」でない為、音の響きも弱い。]

(3) My friend! [「我が友よ」とでも訳すしかないが、これはどうしても日本語の普通の表現に馴染まないことは日本人であれば誰れでも実感するところであろう。つまりこれは呼びかけとして使われた場合の表現で、最初にmy friendと呼びかけて、その後何か文章を続ける型をとったり、最初に何か云った後で、my friendと云って文を終る場合もある。いずれにせよ、この様に人に呼びかけたりする場合に、名詞をただぶつける様な形の表現はどうしても日本語に馴染まないところがある。日本語訳を見てもらえばよく解るが、例の終助詞の「よ」がついている。日本語ではそのまま名詞をぶつけられないものだから、助詞の「よ」をつけたのであろうが、やはり英語の「名詞止め」のstyleと比べると迫力に欠ける。大体日本語の感情の表現法と云うのは、強い感情を音声やアクセント、

抑揚やリズム、息使いや語気で表わそうとするよりも、助詞・助動詞や、各種の修飾語句などを用いて、全体としての文の style として表わそうとする。ここの例で云えば、英語には終助詞の「よ」が無いので、my なり friend なりを適宜強め感情をこめて発音しなければならないが、日本語の場合では「よ」と云う終助詞を添えるだけで、すべて用は足りて仕舞うので、特にどれかの語を強めたり、特別の感情を露わに出して発音することも必要ない。実はこれは日英両語の言語構造や表現形式の差異と云う観点から説明しているわけだが、実際にはその背後に更に非言語的要因も働いていないわけではない。例えば日本の文化伝統の下では感情の露わな表出は必ずしも美德ではないのである。出来る限り感情は表に出さず控え目に丁寧に物を云うのが良しとされる様な文化伝統の下では、感情の素直な表出の結果としての、張りのある力強い迫りに満ちた表現の仕方などはむしろ敬遠されるべき対象としかならないのだ。ところで英語の呼びかけ語としての my friend とピッター照応する表現が実は中国語にも存在する。即ち「我的朋友！」と云うのがそれである。中国語の場合も終助詞が用いられていないため「名詞止メ」が可能となる。従って又強く呼びかける語調は声の調子に頼るしかない点も英語の場合と同様である。更に日本語の場合はそもそも「我が友よ！」などと呼びかける様な云い方そのものが存在しないとも云えるのであるが、中国語では「我的朋友」には何の不自然さも伴わないし、更にこれを拡大して、「我尊敬的朋友！」即ち「我が尊敬する友よ！」などと云い得る。同様の英語の云い方としては“My honorable friend!”などが云える。これも日本語の表現としてはシッカリしないのは云うまでもなからう。]

(4) Sure thing, he's a bore. 「確かに、彼は退屈な男だよ」先ず初めの「確かに」の部分で日本語では副詞的修飾語の形をとっているが英語では名詞的に表現されている (sure thing)。ところでこの文の極めつけは実はそのことではなく、後半の a bore にある。つまりこの bore なる名詞はこれ一語で、「人を退屈にさせる人又は物」の意があり、この様に名詞一語の中に、日本語では用言を用いて連体修飾語の助けを借りて表現しなければならない部分がすべて集約的に表現されている。文意の大半がこの bore なる名詞一語にかかっているわけで、この文は英語名詞表現の中でもその典型とも呼ぶべきものである。ところで「退屈な男」と云った場合の「退屈な」は云うまでもなく形容動詞「退屈だ」の連体形であるわけだが、「退屈な男」と云った場合、それは「人を退屈にさせる男」の意であって、「自分で退屈している男」の意ではあるまい。この事で憶い出したが、かつて「旗本退屈男」なる映画が上映されたことがあったが、この場合の「退屈男」とは「自分で退屈している男」の意であろう。するとこの日本語の「退屈」なる語をどの様にとらえるべきなのであろうか。名詞なのか、それとも形容動詞「退屈だ」の語幹なのか、更には「退屈する」なる漢語系動詞から「する」の部分を省略して云ったものなのか等々色々の疑問が湧いてくる。いずれにせよ、「退屈な男」と云うのと、「退屈男」とで意味が変わるのであるとすれば微妙なところだ。因みに漢語系統の語で名詞の性質を持ちつつ、場合によって形容動詞にも成り得る語は少からず存在する様だ]

(5) It's all Greek to me. 「それは何のことだか私にはさっぱり解らない」これは Greek の部分を一種の metaphor (隠喩) ととらえてみてはどうだろうか。いずれにせよ Greek (ギリシア語) なる名詞がこの文章の中心的な文意を構成していることは間違いなく、その意味でやはりこれは名詞表現の文であると云ってよい。ところで日本語で「私にはさっぱり解らない」の部分を「私にはチンプンカンプンだ」とも訳し得るわけだが、こうなると日本語でも一応名詞表現となる。この「チンプンカンプン」なることは、漢字で書くと

「珍粉漢粉」とも書くらしいが、元々、儒者の用いた漢語をひやかしたのに始まる語とも、又長崎の人が、紅毛人のことばのわからぬことから云い始めたともいわれ、その辺りは定かでない。ただ「アンボンタン」だの「ジャンケンボン」などが立派な中国語であることを考え合わせると、「チンプンカンプン」などはその語の響きが如何にも単音節語より成る漢語であることを思わせるものがある。更に名詞の形をとった *metaphor* として例えば、*Darling, you're the apple of my eye.* 「ダーリン、君は僕にとってかけがえのない人だよ」、*the apple of one's eye* は、瞳（*one's* の部分は *the* にもなる）の意もあるが、ここでは「非常に大切なもの」とか「掌中の玉」の意である。更にやはり名詞が主体となった *simile*（直喩）の例としては、*He is cool as a cucumber.* 「彼は非常に冷静である」などがあるが、いずれにせよ英語の *metaphor* にせよ、*simile* にしろ、その表現の中心に名詞が置かれている例は数多い。]

(6) *I'm quite a stranger around here myself.* [「私自身もこの辺りの地理には全くうといのですよ」云うまでもなく、*quite a stranger* なる名詞表現が誠に英語らしい。これは誰れかに道を尋ねられた様な場合、自分自身もその辺りの地理不案内の場合の答え方なのであるが、是非共憶えておきたい名詞表現の一つである]

(7) *Let him have his say.* [「彼にも云いたい事を云わせてやれ」*have one's say* で云いたいことを云う意味だが、この場合 *say* は動詞ではなく名詞に使われていることに注意されたい。英語に於いて、特に単音節語の Anglo-Saxon 語の動詞が名詞として使われるケースが非常に多い。例えば *have, take, make, cut, go, do, run, look, walk, wait, ride, drive* 等々はそれぞれに名詞としての用法を持っている。勿論これら以外にも幾らでも同様の例はあるわけだが、極言すれば、英語ではかなりの数の動詞は名詞としても使われ、又、同様にかかなりの数の名詞が動詞としても使用可能である。例えば我々が普段名詞とばかり思い込んでいる次の様な語、*flower, water, father, mother, king, queen, dog, people, house, book* 等々にはそれぞれ動詞としての用法もあり、この様な例はまだ他に枚挙にいとまがない。この英語に於ける謂ゆる品詞の転用 (*functional shift*) は何も動詞・名詞間のそれだけでなく、その他の品詞との関係においても活発に行なわれているのである。]

(8) *What's the good of it?* [「そんな事をして何の得があると云うんだ?」似た表現に、*What's the use of it?* 「そんなことをして何の役に立つんだね?」などもある。いずれにせよ英語の方の動詞は *be* 動詞しか使われておらず、それぞれ *good* なり *use* と云う名詞の部分に文意の中心が置かれている。*What's the difference?* (そうだからと云って、どうだと云うんだ?) などの例に於いても英語では *be* 動詞一つに、*difference* なる名詞で実に簡潔に表現しているが、日本語の場合はどうしても文意の中心が述語部分に置かれるため文体 (*style*) そのものが英文のそれとは異なってくる。*What's the matter?* (どうかしたのですか?) などの例でも、英文の方はやはり主語の部分に中心が置かれているに比し、日本文の場合は述語の部分の方に重みがかかっている。この様な相違は日英両語間の表現上よく見られるのである。]

(9) *Good day!* [日中に行われる形式ばった挨拶用語で、後に *stress* をおくと「今日は!」の意となり、前の方に *stress* をおくと「さよなら!」の意となる。実はこの事は何もこの場合にだけに限ったことではなくて、*Good morning!*, *Good afternoon!*, *Good evening!* 等々の場合でも前に *stress* を置いて全体として *rising tone* で云うと「さよなら!」の意となり、後に *stress* を置いて、*falling tone* で発音すると、それぞれの場合に応じた挨拶語の意となる。英語に数多い複合名詞もどちらに *stress* を置くかによって意味

が異なってくるのでよく注意をしておく必要がある。]

(10) Master Charles! 「チャールズ坊ちゃま!」master! と云う呼びかけは召使 (servant) などが主家の少年などに対して呼ぶ敬称であるが、その後には名前をつけて上例の様なものなる。ところで面白いのは、日本などでよく喫茶店の従業員が、経営者のことを master などと呼んでいるが、その英語としての用語法の真偽は別としても、何故この様なことが起るのであろうか。外に似たものとしてマネージャー (manager) やチーフ (chief) などが他の接客業務上用いられている様だが、これらに代るものとして勿論例の漢語表現を借りて、「店長」だの「主任」だの、その他「専務」「部長」「課長」等々色々の場合に応じた上司に対する呼称が日本語にもあるにはある。いずれにしてもこれらのカタカナ外来語や漢語に代る、大和コトバによる呼称はますますムリな様だ。「親方」位のところか、とにかく純粋に「訓読み」だけの呼称を探すとすると仲々見当たらないのが現状である。それはさておき、正直なところ近頃はスーパーの大繁昌で「店長」なる語はよく聞かすが、実際にはそれはウチワで引用されて用いられる方が多いので、直接顧客側が「店長!」と呼びかける方は少い。勿論現実にはいくらかは直接の呼称としても使われてはいる。ただ筆者として云いたいのは、それら音読みの漢語の謂わば「称号」乃至は「官職名」或いは「呼称」と云ったものから受ける感じは、何か「翻訳調」を思わせる響きがあり、その前後の日本語とシッカリ合致しないものがある。更に又その様な呼称も置かれている立場が変わると途端に使えなくなったり、又は接尾語の「さん」なりをつけて「店長さん」とか「主任さん」なりと云わねばならなくなることは、日本人間関係の中では日常茶飯事の出来事である。漢語を用いた呼称が何んとなく固い印象であるとすれば、そこにカタカナ外来語が登場することになるのだろうが、確かにカタカナ語の呼称の方が若干の柔かさは感じられるし、スマートな感じもある。しかしそれでもまだ翻訳調の響きもあれば、context (文脈) の中での収まりはあまり良くない。つまりこれは本来日本語の文脈の中で、人の名前や役職名などをそのまま名詞一語ズバリで呼称する習慣や用法が特に発達していなかった為に、近年になって急にその様な云い方が漢語やカタカナ外来語の力を借りて、必要に迫られて云われ始めたのではなからうか。上例の場合などはまだしも直接にズバリ呼びかけられる例であるが、現実にはそう行かないケースはいくらでもあるのだ。例えば、「警官!」「運転手!」「給仕!」「管理人!」などと日本語で直接呼べるであろうか。不可能とは云わぬが、先ずムリであろう。どうしても「さん」づけにするか、「警官」の場合だと、接頭・接尾の両辞をつけて「お巡りさん」と呼ぶしかあるまい。ところが英語では如何であろう? 云うまでもなくすべてこれらはズバリ名詞をそのままぶつけて云えるのである。“Officer!”, “Driver!”, “Waiter!”, “Concierge! (仏語系) or Superintendent! (略して Super! と云う)” の如くである。これらは別に不自然な響きもなく、どの様な文脈の中でも抵抗なく使えるのである。“Excuse me, stewardess!” 「ちょっと、ステewardessさん!」なども同様例。この辺りは中国語ではどの様になっているのであろうか。例えば中国語では例の「同志」と云う呼称があるが、最初は云うまでもなく政治的な意味合いを持った呼称であったが、今では広く一般に見知らぬ者同志の間で、男女・上下の別なく使用されている。従って上例の場合でも、ただ「同志!」とだけ呼びかけてもよいわけだが、例えば運転手などに対しては親しみをこめて丁寧に「司机同志!」と呼ぶことも多い。特に年配者の場合などは、「老同志!」、少年に対しては「小同志!」、特に小さい子供には「小朋友!」、などともなる。ただ外国人に対しては、一般には「同志」ではなく、「先生」が使われる。いずれにせよ、革命後の中国は、尠くとも建前の上では、sexless & classless society (性

差別なく、階級なき社会）と云った一面が強く、例えば男女・上下の別を問わず「同志」なる同一の呼称が広く一般に用いられているなども、少くともコトバの上でその間の事情は読み取れる。この様な呼称の存在は、未だに sexism（性差別）や上下関係意識の強い（hierarchy-minded）日本人社会は云うに及ばず、その点では先進国と思われていた英米諸国に於いてすら見出されない。事の善悪は別として、確かにこの「同志」なる呼称は、特に我々日本人などには culture shock にもあたるもので、無差別平等主義の見本とも映るもので、正に「階級なき軍隊」をすら生み出した革命中国の思想改造の徹底ぶりを窺わせるものがある。かつては同文同種とも云われた日中両国民の対人関係の様態の差は余りにも大きく、当面両者の差は埋まりそうにはない。]

(11) Christopher Columbus! 「こりゃまあ、おったまげた！」強い驚きを表わす場合の表現だが、この様に人名をそのまま用いる表現は外にも、例の “Jesus Christ!” などがある。これは又ただ “Jesus!” と、或いは “Christ!” と、或いは “Christ!” を婉曲表現にして Christmas! などとも云う。更に “Caesar!” や、 “Scott!” などもある。よくアメリカの teen-agers などの使っている “Gee!” なども、Jesus を直接使うのを控えて、若干 modify された形で Gee を使っているわけで、これは例の euphemism（婉曲表現）と考えてよい。“Gosh!” や “Golly!” などと云うのもあるが、これも “God!” の euphemism と考えられる。とにかくこの God を用いて「驚き」の気持を表わす表現は非常に数多い。“My God!”, “Great God!”, “Good God!” や、主イエスを表わす Lord を使って “Good Lord!” などもある。いずれもみな「あゝ！ おゝ！ まあ驚いた！ へエッ！ そりゃ大変だ！」等々の非常に強い驚きの感情を表わしたものである。その他日本語としては少し考えられない様な意味を持った名詞を用いて強い「驚き・意外」と云った感情を表わす表現がまだまだ英語には数多くあるが、あと少しそれらの例も挙げておこう。

Holy cats!, Holy cow!, Holy mackerell!, My hat!, などの驚きを表わす表現に使われている名詞をそれぞれの原意に戻って考えて頂ければ、如何にこれらの感情表現が日本人には奇異に響くことか。外にもまだ例を挙げていけば、Great guns! (オヤ、しまった!), Rats! (バカな！ まさか！ チェッ!), Holy smokes! (マア驚いた!), Fudge! (バカな!), My goodness! (エッ！ オヤ！マア 驚き・怒りなどの表現で、主に女性に用いられる場合が多い), Good heavens! (オヤ、それは大変！ シマッタ), My eye! (マア、驚いた！ 怪しいもんだね!), Boy! (オヤ!), Brother! (オヤオヤ、此奴め!), My word! (オヤオヤ！ これは驚きあきれたね!), My (or Your) feet! (そんなバカな事があるもんか!), Holy Moses! (オヤマア!), Holy catfish! (ヒューッ!) 等々いくらでもこの様な例は数多く英語の中に存在する。いずれにせよこれらの中では名詞が謂わば間投詞的に用いられているわけで、日本語に於ける感情表現とは著るしい違いを示している。日本語の感嘆詞の中味を探ってみると名詞と云うものは非常に少い。仮りに名詞ズバリのものであったとしても、終助詞（例えば、「な」や「なあ」等の「感動・詠嘆」の意を表わすもの）などが附着してくる場合が多く、「名詞止メ」には成りにくい。云うまでもなく間投詞なり感嘆詞と云うものは、人間の感情が最も昂まった時に用いられるもので、それ自体 punch の効いた強い語調のものでなければならぬ。この場合「文型式」の感情表現よりは、語句単位の方が望ましい。それも「機能語」(function word) よりも「内容語」(content word) の方が望ましい。而してこの「内容語」の中で最も望ましいものが「名詞」であることは論を俟たない。その意味で英語の感情表現は非常にすぐれた表現形式を生み出していると云えるのではなからうか。]

(12) Ladies and Gentlemen! 「紳士淑女諸君!」 or 「お集まりの皆さん!」, 云うまでもなく前者は「漢語調」の訳であり, 後者は「大和コトバ」によるそれである。ここでは謂わば, 不特定多数の人間に呼びかけている場合であるが, 特定・不特定, 単数・複数の相手たるを問わず, 一般に直接の相手, 或いは等三者等に対する呼称と云う問題になると日英両語間に於いてその差は大きい。決論から云ってしまえば, 英語の場合は比較的その間の事情は簡単明瞭で, 要するに相手の名前, 位階・職名, 親族名称等々が原則として名詞ズバリの形でそのまま投げつけて呼ぶことが可能である場合が多い。それに比し, 日本語の場合は, そもそも何らかの形ででも相手に呼びかける, それも何か具体的な明確な意味を持った語, 特に内容語としての名詞などを用いてそれを行うと云う事自体が, 極言すれば日本語の表現形式の習慣に馴染まないとも云い得るのである。これには言語上の, 或いは非言語的要因のそれぞれの理由もあろう。いずれにせよ大まかに云って上述の様なことが決論的には云えそうである。

ところでこの辺りの事情をこれから若干の具体例を挙げながら考察してみたい。例えばごく親しい恋人間, 夫婦間, 親子兄弟間等々で行なわれる呼称が英語ではどの様なものがあるのかを見てみたい。ところでその際, 少しく厄介に思われることがある。それは訳語の問題である。どうもそれら英語の訳語としてピッタリとしたものが日本語の中に見出されないのだ。考えてみればこれは当然のことでもある。特にこの分野での日英語の表現様態はあまりにもその差が大きい。とても直訳など出来るものではない。それで訳語については場合によっては特に与えない(と云うよりも与えようがない)こともあることを御承知おきたい。例えば夫婦間でよくアメリカなどで, “honey; sugar” などの語が用いられているが, これなど直訳はおよそナンセンスであろうし, さりとて「ネェ, アンタあ!」などと訳すのも不自然な響きのする場合もある。つまり communication の様態そのものが違う場合に, ただコトバだけを照合せようとしても, どうしてもムリがあると云うものだ。とにかく, それらの事を一応頭に置きながら早速具体例を見てみよう。young man (「お若けえの」この訳なども不自然に響く。「若者よ」とも勿論云えぬ。要するに, 見知らぬ若い人に向かって呼びかける様な表現や語句は日本語には発達していないのである。「ちょっと」とか「もしもし」位のところだろうが, こうなると呼びかける相手が, 若者であるなしは何の関係もないのである), my boy (「ネェ君」男への親しい呼びかけ), My fellow Americans! (大統領などが国民に呼びかける時に用いる表現である。これも同じ文脈で日本語での同様の表現はとてもムリであることは常識的に誰れにも分るだろう)。“Hi, stranger! How have you been?” (長らく会っていない相手におどけて云っている文脈での表現だが, これなども前半部の「名詞表現」の部分は先ず日本語にはならぬ。この様な文脈でのこの様な表現形式それ自体が日本語では発達していないと云うことなのである), Hey, buddy. (「おい相棒」 or 「よう兄弟」等のくだけた親しい者への呼称であるが, この訳語の場合なら何とか日本語でも使えそうな気がしないでもない), Grandpa (おじいちゃん), Grandma (おばあちゃん), この辺りの例になると, 日本語では例の接頭・接尾の両辞をつけて表現される正に日本語によく見出される典型例である。英語ではやはり名詞一語ズバリが用いられ, 別に接頭語も接尾語もつかぬことは云うまでもない。Lieutenant! (「警部!」これなどは同じ警察部内の人間同志ならば, 日本でも「警部!」などと呼称し得るであろうが, 部外者が面と向って, 「警部!」などとたとえ職名とは云え呼び捨てには出来まい。この辺りに日本社会の閉ざされた一面として, in-group と out-group との峻別から来る言語表現上の double standard を垣間見ることが出来る様だ。勿論どの様な

言語にも「立場・状況」が変われば、その表現様態を変えねばならぬ場合が大なり小なり存するわけであるが、日本語の場合のそれが英語の場合に比し、質量共に上廻っているのは先ず間違いない所だ。old girl (特に英国などに於いて、「おい君」などに当る親愛の情をこめた表現)、Come on, pet! (「さあ、いい子だからおいで」pet は呼びかけに使われており、「いい子」に当る表現である。因みに teacher's pet は、「先生からひいきにされている子」の意である。)

(例) Harry? David Rose. [「ハリーかい? デビッド・ローズだよ」これほどの様な場面かと云うに、David Rose なる平の社員 (underling) が自分の上司に対して電話をかけているところなのだが、驚くべきことに彼は自分の上司をその first name で呼び出し、自分の方もただその姓と名をそのままぶっきら棒に投げつけているだけで別に丁寧な文形式もとっていない。とにかくおよそこの様な「物云い」が部下から上司に向けて行なわれるなどと云う事がこの日本社会の上下関係に極めに過敏な人間集団の中で考え得るであろうか。更にアメリカなどの会社で例の社長付個人秘書とも云うべき girl Friday が上司である社長をその first name で呼んでいることは、筆者自身の海外での雇体体験からも確認し得ることである。大学のセミナー辺りでも、学生がその指導教授をやはり first name で呼んでいることがある。更に TV のニュース番組の中でも解説者が複数の場合、お互いがそれぞれ first name が呼び合っている。これなどはお互い同志、同じ職場の同僚なのだから当然だとも思えるが、しかし日本では、外向きは勿論のこと内向きの場合でも、お互いの同僚を first name はおろか、family name でさえも呼び捨てには出来ないで、「さん」付けするなり、更に学校などでは「～先生」と「先生」を付けて呼んでいる有様である。革命後の中国でも、この中国語で云う「直呼其名」(呼び捨て) はかなりの範囲に亘って見られる現象であり、場合によってはアメリカでのそれを上廻るものがある。いずれにせよ、我々ウェットな日本人には考えられるべくもないドライ極まる人間関係の世界が存在しているのは確かな様だ。その典型例を一つ中国語の会話のヤリトリの中に見ておこう。場面としては一人の学生が自分の教授宅へ電話をしているところで、教授が偶々留守で家の者が応待に出てくる。A は学生で、B は留守宅の家の者とする。

(実例) A: 楊鴻飛在吧? (楊鴻飛いるか?)

B: 他出去了。(彼は出かけているよ)

A: 他回来以后給我打個電話, 好嗎? (彼が帰ってきた後で、私に電話くれ、いいかな)

B: 好吧。(よろしい承知した)

どうもこの様な brusque な会話のヤリトリをその対極に在る日本語の対話様態で翻訳する事は至難の技である。従ってこの訳文の仕方には直接触れないでほしい。問題は中国語の中での表現様態にある。つまり学生が自分の教授を「直呼其名」(呼び捨て) している。更に二度目には代名詞の「他」を用いて教授を呼んでいる。実はこの辺りはそのドライな対話様態では中国語のそれに引けをとらぬ英語に於いても、例えば学生が自分の教授を代名詞 he を用いて引用することには若干の抵抗感があると云われているのだ。更に学生が教授の家人に折返し電話をくれる様に要請(命令?) しているところなども先ず日本人間関係の下では考えられぬところであろう。それから家人が教授を「他」なる代名詞で受けているところも、日本語の感覚ではドライに響き、且又日本語の物云いには馴染まぬ云草である。勿論断っておくが、この様な対話がすべていつも中国人の間で行われているなどとは筆者も云わぬ。これは極端な例なのかも知れぬ。ただ仮に極端な例だとしても、例

えば日本人の場合を考えてみてこの様な対話は可能であろうか？ 先ず日本語には例の「丁寧体」があり、その様な表現様態が余りにも深く広汎に滲透している為、中国語の様な brusque な云い方自体、殆んどどの場面でもリであると云える。更に日本人の上下関係意識・親疎意識は異常とも云える位に根強く、およそ日本人である限りそれらの意識から免れることは先ずムリであろう。とても中国人学生の如き blunt な物云いの出来ぬことは筆者が何もここで弁解がましくその理由を述べ立てるまでもなく日本人社会で長年暮してきた者にとっては自明の理である筈のものであろう。勿論中国語に於いてもこの様な brusque & blunt な物云いは近年の革命後に特に顕著に現われてきた現象で、革命前や或いは国民政府治政下の例えば台湾などでは若干の相異の存することも想像としては成し得るが、それらの諸々の事情を差し引いてもなお且中国語と例えば日本語の物云いの様態には多大の差異の存するを否定することは不可能である。つまりこれを要約すれば、中国語に於いては原初的に文体の上で体系的な敬語体を欠いているのであり、それに反し日本語では体系的且つ極めて複雑に分岐した敬意表現がすでに古い時代から確立しているのである。

(日本語の敬語の歴史は既にその国語史と共に始まる事については先に触れたところである)。この辺りの事情は決定的な相異であって簡単に埋め得る gap などではない。英語に於いても基本的には中国語の表現様態と通ずるところがあり、日本語に於ける如き複雑多様な敬語・敬意表現は存在しないと云い得る。]

(14) **Bon appétit!** [「何もございませんが、どうぞ御遠慮なく御召上り下さい」いや何とも日本語の方は冗長な云い回しである。しかしこの様な丁寧体の style こそは、普通一般に我々の日常生活の中で始終行なわれていることで、別に冗長な云い回し (redundancy) と日本人としては感じていない人も多いのかも知れないが、英中語などと比較すると、日本語の云い回しの冗長さは否むべくもない所だ。中国語では「請吃飯!」でよい。ところでこの **Bon appétit!** は実はフランス語である。つまりフランス語でも英語同様簡潔な名詞表現がいくらかでも見出されるのである。名詞に表現の中心を据えて、その前に形容詞を冠せて、全体として「名詞止メ」にする。勿論、動詞などを用いた「文型式」などはとらない。これと同様の例に、やはりフランス語から英語にも入っている、**Bon voyage!** (「航海の御無事をお祈り致します」。今風に云えば、「どうぞ楽しい御旅行をなすって下さい」とでもなるか。いずれにせよ、何か翻訳調のぎごちなさが残る。「どうぞお気を付けて行ってらっしゃい」辺りが自然な日本語かも知れない。ところでこの様な訳文を原文のフランス語や英語の **Have a good trip!** (勿論英語でも **Bon voyage!** は使われている) と比べるとかなりの違いがあることが分る。ただ英語の **Have a ~!** の構文は動詞を用いた「文型式」をとってはいるが、**have a good trip** なる表現自体はやはり英語に多用される名詞表現の一つの典型である。]

(15) A: Name? (お名前は何かおっしゃいますか?)

B: Charles Saunders. (チャールズ・ソーナダーズです。)

A: Birthplace? (お生まれはどちらですか?)

B: Marietta, Georgia. (ジョージア州のマリアッタです。)

A: Address? (現在はどちらにお住まいですか?)

B: St. Petersburg, Florida. (フロリダ州のセント・ピーターズバーグです。)

A: Occupation? (御職業は何ですか?)

B: Mechanic. (機械工です。)

A: Religion? (どんな宗教を信じて居られますか?)

B: Methodist. (メソジストです。)

A: Marital Status? (御結婚はして居られるのですか?)

B: Bachelor. (いいえ、独身です。)

A: Any questions? (何か質問お有りですか?)

B: No questions. (いいえ、特にございません。)

これは筆者が日英語での或る特定場面を想定して自由に設けてみたA B間に於ける会話のヤリトリで、少し出来過ぎているとお叱りを受けるかも知れないが、併し英語において斯様な殆んど名詞一語だけをまるでピンポン玉の様にぶつけ合っているが如き、極めて impersonal な対話様態が厳存することは否めない事実なのである。訳文のベト付いた感じに比べ、原文からは、「能率」と「合理主義」の極致を感じる。つまり英語には斯様な謂ゆる「一語文」(one-word sentence) が非常に数多く見出されるのに比し、日本語での一語文の成立要件は遙かに少い。]

(16) No luck. 「ついてないなあ！」これは no と云う形容詞に名詞が接続する型の否定表現であるが、強い感情をこめて云うのに最適の型で、語気・語勢が強い。一般に日本語の「副詞+動詞」結合は、英語では「形容詞+名詞」結合の型をとって表現されることが多いが、特に強い感情を表わす、否定命令文などではその効果は大きい。「no+名詞」型の場合、この名詞の部分に来る語には若干の性格上の違いがある。例えば純粋の名詞そのもの(例えば No chance. 「チャンスはない」、No way. 「とんでもない!」、No problem. 「大丈夫、何でもありませんよ」、No cards. 「葬儀の新聞広告などで、本広告を以て通知に代えるの意」、No flowers. 「死亡広告の文句として、供花御辞退致します」、No horseplay. 「バカ騒ぎは止めろ!」、No idea. 「分らない」、No hard feelings! 「悪く思わないでね!」等々は大体みんな本来の名詞が使われているが、よく単音節語 (monosyllables) で、動詞にも名詞にも共用される性質の語で、この場合その名詞用法になっているものもある。例えば、No rush. 「急ぐな!」、No hurry. も同様の意。No sweat. 「平気だ、何でもありませんよ」、No bother. 「構わんよ」、No comment. 「云うことなんかありませんよ」、No credit. 「掛け売りお断り」、No wonder. 「なるほど、当然でしょう」等々あるが、何れにせよ、「no+名詞」型の表現が非常に簡潔で、又その名詞が短音節のものが多く、又当然にも「名詞止め」であるなどの理由により、この型は「禁止」・「命令」の意を表わすのに最適であると云える。]

(17) Oh, brother! What a nuisance! It's such a bother! 「オオ、そんな馬鹿な! 何んて事なんだ、そんな厄介な事ってあるか!」これは感嘆の表現が三つも連続して現われてくるのだが、それぞれ名詞が中心になって活躍していることは間違いない。先ず第一句は Brother! と云う如く、そのまま名詞一語がズバリ間投詞的に使用されている。第二句の型は感情表現の中に数多い。恐らく “What a 名詞+「S+V」!” の原型の「S+V」の部分が省略されたものと思われるが、今では「S+V」の存在を感じさせない程に慣用化されて “What a 名詞!” の型で使われている。What a pity! 「何とも残念至極!」、What a shame! 「何てひどいことだ!」、What a life! 「何たる人生であることか!」、What a game! 「これは面白い!」、What a plague! 「一体全体! まあ!」、等々その例は多い。勿論 What a pity! の場合など、名詞一語ズバリ Pity! 「遺憾千万!」とも云える。例文の第三句は一応「文型式」を整えているが、勿論 Such a bother! と云えれば、名詞一語ズバリ、Bother! と云い得る。Oh, bother! と云えるし、そうなると第一句の型と変らなくなる。いずれにせよ、“Such a 名詞!”, “What a 名詞!” 更には “Quite

a 名詞!”などの形で感情表現が可能である。いずれにせよ、これらの表現の特徴は名詞中心の簡潔な表現で、すべて「名詞止メ」であることだ。]

(18) Go west, young man! 「若者よ、西部へ行け！」アメリカ開拓時代の slogan の一つとして、この様に云われた時代があったわけだが、ここではこの slogan を語学的に観察してみたい。先ず young man のところの呼び掛けだが、これについては今までにも何度となく述べてきた。要するに young man に限らず、ほとんどの名詞を英語ではそのままぶつけることが出来るわけで、今更この事には触れない。問題は、前半の Go west の部分の west なる本来は名詞である語が副詞的に用いられている部分である。仮りに west なる語をそのまま名詞として用いようとすればこの文は Go to the west, young man! となるところである。勿論これで悪いわけではないのであるが、何しろここは slogan として迫力ある簡潔な表現でないと困る。となると例えば「機能語」たる前置詞などが介在すると全体としての語調・語勢が落ちる。やはり「内容語」の中核たる名詞がズバリ前面に出て来る方が punch が効く。つまり若者に呼びかける slogan としては Go west の方がはるかに好ましいのだ。以下にこれから名詞が副詞的に用いられている文例を掲げるのでよく御研究願いたい。いずれも前置詞などが介在していない為、非常に力強く、印象的で簡潔である。それだけに訴えかける力も強い。因みにこの様な名詞の副詞的用法も従来からのものはとにかく、最近の例は、やはり Americanism に圧倒的に多く見られる様である。He lives *each day his way* (彼は毎日を好き勝手に暮している), Go *Greyhound!* (グレイハウンドで行こう!), Yankee, go *home!* (ヤンキー、ゴーホーム!), Send this letter *airmail, please.* (どうぞこの手紙航空便でお送り下さい), Please come *this way.* (どうぞこちらへおいで下さい), He worked *ten full hours.* (彼は10時間たっぷり働いた), *Which way* do I go by cable car? (ケーブルカーでどちらの方へ行けばよいのですか?) Of course, I'll go *coach.* (勿論、私は普通席で行く積りです), She always travels *first-class.* (彼女はいつも一等で旅行します), He works *double shifts.* (彼は二交代制で働いています), Most Japanese think *the same way.* (大抵の日本人は同じ様な考え方をする), He made up a fortune *one way or another.* (彼は、あれやこれやで一財産作り上げた), He has mastered Chinese *the hard way.* (彼は苦勞してとうとう中国語をマスターして仕舞った), He'll be back here *any minute.* (彼はすぐにここへ戻ってくるでしょう), I'll see you again *this coming Sunday.* (この日曜日に又お会いしましょう), See you *some other time.* (又そのうちいつか会いましょう) 等々その例は多い。スッキリと引締った表現で中々心地良く響くではないか。]

(19) Attention! 「気をつけ！」軍隊などで兵隊に号令をかける時に使われているわけだが、勿論名詞一語がそのまま投げつけられている。例の Attention, please. は我々にもお馴染みの表現だが、あれもやはり同様の表現だが、こちらは please がついてはいる。日本語では「御案内申上げます」に当たるか。さてこの様に英語ではとかくに、日本語で動詞が主体となって表現されている表現が名詞で、それも一語ズバリで表現されるケースが多い。それは主としてやはり感情・意志・禁止等々のつまり謂ゆる人間の「知・情・意」に関するものの中で、「情」と「意」に関する表現に於いて特に多く見出されるのである。これは考えてみれば当然の事でもあり、visible にして tangible であり、意味の自立性を持ち、具体的にして安定性を持つ内容語の中核は云うまでもなく名詞なのであるから、その様な「情」と「意」に関する表現に名詞はピッタリなのである。何と云ってもかかる場合の表現として名詞に優る他の品詞は存在しない。特にその名詞をただ一語だけ投げつける形の

表現は最も *punch* の効いたものとなり、その魅力には抗し難いものがある。今一度その様な例を *at random* に少しだけ挙げておこうと思う。 *Congratulations!* (おめでとう!), *Action!* (演技始め!), *Silence!* (静かに願います!), *Objection!* (異議あり!), *Rubbish!* (Nonsense! と同意), *Thanks!* (ありがとよ!), *Fiddlesticks!* (バカバカしい! 下らん! *fiddlestick* の原意は *fiddle bow* つまり「バイオリンの弓」更に「つまらぬ物」; 「極く小さいな事」の意もある。 *Don't care a fiddlestick for that.* 「そんなつまらぬ事など気にするな!」) *Bags!* (僕が一番だ! 自分にそれをする権利があるとして英国の学生などの間で使われている。例えば、 *Bags, I first drink.* 僕が一番に飲むんだ!) *Thunder!* (全く! マア、いまいまい! 畜生! 等、原意は雷とか雷鳴) *Sucks!* (何たるごまだ! いい気味だ! *suck* はこの場合、「失望」とか「失敗」の意と解される) *Good morning, sweetness!* (おはよう、可愛い子ちゃん! *sweetness* なる本来は抽象名詞であるものが、可愛い女の子に対する呼称に使われているのは興味深い), *Sis!* (姉妹がお互い呼び合うのに使われている呼称、姉から妹にも使用可能。 *Bro!* についても全く同様の事が云い得る), *Damnation!* (畜生! チェッ! *Hell!* についても同意), *Look, wife!* (見てごらん、妻よ! これはどうも日本語にはならない。大体日本語で自分の妻を「カアチャン」などとは呼ぶが、「妻よ!」などとはまさか呼ぶまい), *Law!* (オヤ、マア! 驚きを表わす。方言として用いられている様だが、原意は「法律」), *Bastard!* (馬鹿め! イヤな奴め! 原意は「私生児」俗語では、「イヤな奴」とか「きらわれ者」の意), *Shit!* (クソッ! 畜生! *shit* は文字通り「糞」の意。これと関連して *Bullshit!* があるが、デタラメ云うな! 下らん! などの意), *Fudge!* (バカな! 原意は「下らぬ事」とか「たわごと」), *Heyday!* (ヤァ、ヨッ、オオ! 喜び・驚きなどを表わすが、原意は「最盛期」), *Question!* (本題に戻れ! 異議あり! 議会などで発言者の脱線を注意して叫ぶ) 更に必ずしも名詞一語ズバリの表現ではないがやはり「名詞止メ」又は名詞に *prominence* の置かれた表現として、 *God's blood!* (ヤッ、驚いた。シマッタ!), *A pox on you!* (こん畜生!), *More power to you!* (頑張れ!), *All power to your elbow!* (しっかり!) 等々名詞主体の感情表現は英語に数多い。]

(20) *I hear of his death, too.* [「彼が死んだとの噂を私も耳にしています」ここでは *his death* の部分に名詞表現が使われているわけだが、実はこの部分は例の *Nexus Substantive* (ネクサス実詞) と呼ばれているもので、この型の名詞表現も英語には数多い。これも直接には「文型式」をとっている様には見えないが、実際には、名詞や名詞相当語句と形容詞や形容詞相当語句との結合で、主語・述語関係を実質上形成しているものことで、つまり形式上からの主語・述語関係だけでなく意味上の主語・述語関係をも意味する。動名詞 (*Gerund*) も *Nexus Substantive* の一種ではあるが、助動詞を除くすべての動詞に当てはまること、また動詞が統語論的であることから、他のネクサス実詞と異なる。ところでその事はこれ位にして、早速 *Nexus Substantive* の諸例を見てみよう。とにかくこれらも立派な「名詞表現」の一種なのである。 *We noticed his kindness.* (私達は彼が親切であることに気付いた), *She was informed of his unfaithfulness.* (彼女は彼が浮気をしていることを知らされた), *On his arrival, we all started for the concert.* (彼が到着するや、我々はみんな演奏会に出かけた), *I'm sure of his diligence.* (私は彼が勤勉であることを確信しているよ)。若し *Nexus* 構文を用いないと、これらの文は単文でなくすべて複文となり、それだけ冗長な表現となるところである。]

この辺りで当小論文の要点につき今一度再確認しておきたい。英語に於ける「名詞表

現」の多用は、他動詞構文としての「S+V+O」文型の固定化がそれに拍車をかけたことと見られること。英語に於ける情景描写が、物理的、空間的位置関係や、途中の動作のプロセスよりも、その動作の行われた後の結果や状態の叙述に重点の置かれる結果として、どうしても本来安定した静態的要素を持つ名詞が好んで用いられることになること、更に英米人が冗長な不明瞭な物云いを嫌う結果として、簡潔・明快な表現を好み、名詞の有する属性が正にそれに適合していたこと、それに反し日本語の場合は、「含み」「余韻」のある表現が好まれる結果、更に文末が「用言止メ」の場合が多く、それらに助詞・助動詞と云った付属語が接続・付着して、どうしても文章が用言性の強い冗長な云い回しになり勝ちで、この違いは特に日常の口語体、とりわけ「感情表現」のそれに於いて顕著に目に付く現象であることを指摘した。英語に比しての、日本語に於ける敬語及び敬意表現の複雑さが上述の差異に拍車をかけていることは云うまでもない。ただこれらの事実にも拘らず、過去千数百年に亘る我国の漢語受容の歴史が、日本語の本来の固有の性格を大きく変容せしめ、その動詞中心的性格から、名詞中心的性格へと移行して行った過程についても若干触れたのである。この問題については独立のテーマとしてこれを取り上げ機会を見て詳述したいと思っている。ここではあくまでも英語名詞表現の諸相の紹介と、その検証に主たる努力が払われたのである。ただ一言この日本語に於ける名詞表現云々の問題に触れるとすれば、それに決定的役割を演じた中国語そのものの性格についても一言しなければならなくなる。例えば中国語はよく名詞過多の言語 (noun-dominant language) であるとも云われているが、それにはそれなりの理由がある。卑近な例としては、英語では当然にも副詞の部類に属する様な時間詞や方位詞が名詞の性質をも具備して例えば主語に立つ事が出来ること、更に修飾・被修飾の関係に於いて、例えば英語などの場合に修飾語としては形容詞或いは形容詞相当語句、乃至は機能語 (function word) などの助けを借りて謂わば統語法 (syntax) の立場からその様な機能を代行させると云った現象が見られるのであるが、中国語の場合、名詞のまま他の名詞を修飾させることが極めて普通に行なわれており、しかも更に幾つもの名詞が羅列的に並べられ重層的構造をとって最終的に被修飾語に集約されると云った形の表現型態が可能である。中国語の文章構造なり表現形式の中で最も頻繁に見受けられるものこそ、この「修飾・被修飾の関係」を表わす構造の型であり、しかもその際の構造の内味は「N+N」型 or 「N+N+N+……」型の如き名詞のみの羅列形式のものである。実際この様に幾つもの名詞の羅列が可能なのは形態変化を持たず、孤立語としてさほど統語法にも頼らず、機能語もそれほど多くない中国語にしてはじめて為し得る業と云えるので、この点では本論文の主要 theme である英語に於ける名詞表現に於いても、とても中国語に於ける程には名詞の自由な羅列は行ない得ないのである。かかる名詞過多の、名詞のみの自由な羅列の行ない得る中国語の洗礼を歴史の当初より長年に亘り受けてきた日本語に於いても従って当然にも応分の名詞的表現が可能なのであり、又実際に日本語の中にもその様な名詞表現を我々はいくらでも見出すのである。つまり漢語の多用は必然的に日本語の表現形式を変容せしめ、結果的に名詞表現の多用へと連がるのである。ヨーロッパ系統の言語の中では、例えば英語などは謂ゆる「N+N+N+……」型結合が比較的自由に行ない得る方の部類に属しているが、ロマンス語系統の言語 (the Romance Language Family)、例えばフランス語などではその様な名詞結合は必ずしも自由に行ない得るわけではない。更に中国語で例えば名詞述語文の場合などに copula としての「是」などが省略される場合も多く、「蘇老師北京人」(蘇先生は北京の人です) などの文では尠くとも形式上は述語部分の中心をなすべき動詞などは姿を現わさず、ただ一連の名

詞がズラズラと並んでいるだけの文である。名詞表現の多用で知られる英語でさえも、まさかこんな文章は成立しまい。中国語こそは正に名詞表現の雄であり、その中国語から長年に亘り多大の影響を受けてきた日本語に名詞表現が見出されるとしても何らの不思議もないわけである。しかしここではこの日本語に於ける名詞表現の問題については先述もした通りこれ以上の深入りはしない。ところで筆者の本当の狙いは英語名詞表現の解明にのみあるのではない。幼年期に初めて英語を耳にした時の感動は今でも続いているわけであるが、その感動を決定付けたものは英語表現の持つ「迫力」(punch)であった。その英語の持つ迫力の源泉は奈辺に存するのであろうか。その素朴な疑問がその後今日に至るまで筆者の脳裏を去ることなく続いて来た。その疑問に答えてくれるものとして、偶々「名詞表現」なるものがそこに存在していたと云う事に過ぎない。確かに名詞は他のあらゆる品詞の中で最も重要且つ必要不可欠のものである。それは名詞の本来有する属性にある。目に見え (visible), 手に触れることが出来る (tangible), つまり具体的な形を持った、最も我々に身近な存在である。一見上述の定義に反するかに思える抽象名詞でさえも、やはり他の品詞と比べれば、その意味の自立性、安定性、従って主語にも立ち得ると云った極めて重要な特性を具えているのである。つまり一般に名詞は他の品詞の助けを借りることなく、自主独立の存在たり得る唯一の実体 (substance) を有する品詞であると云い得る。以上のことから見ても、謂ゆる「名詞表現」なるものが、簡潔にして明快、力強く迫りに満ちた表現形式であることが容易に理解され得るであろう。

ただ英語の表現形式に迫力を与えているものは、その「名詞表現」のみではあるまい。例えば、文の形式と云った観点からは、複文よりは単文を好むと云った面も考えられる。而してこの単文への傾斜と云うことは、自動詞よりは他動詞、更には抽象名詞、無生物主語の多用などとも関連するわけであるが、確かにこれらの一般に「他動詞構文」と呼ばれる、一群の強力な他動詞 (bring, drive, induce, lead, put, tell, cause, find, keep, leave, send, lay, compel, force, make, take, etc.) を持った「S + V + O」文型の多用が、英語に迫力を与えていることは間違いないところである。尤も、先述の「名詞表現」とこの「他動詞構文」とは、それ自体密接な関係にあることは云うまでもないことではあるのだが。

ところで今度は視点を変えて、英語の音韻・音声組織がその迫力ある表現効果と如何に係わっているかも興味深い問題である。その点でもやはり筆者の予想に違わず、音声・アクセント等の vocal side から英語の持つ力強さは裏付けられている。つまり英語に於いて殆んどどの語は閉口音 (閉音節とも云う) で終り、頭子音には、連続した一群の子音が立ち得る。別にこの一連の子音群は語頭のみならず、語の中間部、語尾の部分にも現われる (例えば strengths や scrambled などの語を研究されたい)。それから英語に於ける数多くの単音節語 (monosyllables) の存在がある。一つの文章が凡て単音節語より成ると云った文は英語に数多い。特に k, g, p, b, t, d などの破裂音を持った単音節語は非常に強い語調を持ち、感情表現などに最適である。更に英語のアクセントは強弱アクセント (stress accent) であり、文強勢も含めて、更にリズム、イントネーションと云った要素も考慮に入れて、全体として非常に表情豊かな力強い表現が可能である。英語に於いて一つの文章を構成する文の成分としての内容語 (content word) は云うに及ばず、主として統語的機能を司る機能語 (function word) に至るまで、それぞれの語がそれなりの表情を持っていると云える。それ故にこそ、それらの各語は独立して文法で云う謂ゆる「一語文」(one-word sentence) としての使用も可能となる。この「一語文」を支える要素としては intonation を始めとして、アクセント、リズム、ストレス、声の調子、更には顔の表情、身体全体を

使つての *gesture* 等々種々あり得るわけだが、同時に日本語に於ける如き「丁寧体」や、各種の附属語（特に問投助詞、接続助詞、終助詞等）の多用、終止形・命令形などの直接的使用の忌避と云つた類の、謂わば一語文の成立を困難ならしめる諸要素から英語は免がれている。逆に云えば、それ故にこそ、日本語に於ける主として機能語の働きを、音声面での多彩な機能様態、更には *non-verbal communication* の支援を伴つて *cover* していると云えるのである。従つて英語に於ける *colloquialism* の様態は、日本語のそれに比し、極めて表情豊かなメリハリの効いた *dynamic* なものとなる。勿論この *dynamism* と云う事には、英語の音声音韻組織や、アクセント、リズム等々の発音上の諸要素が係つてもいることは上述もした¹ とにかく、英語に於いては、平たく云えば、文を構成する各語がそれぞれ「生きている」と云う実感がある。更に英語国民の虚飾にとらわれない實際的且又合理的な *mentality* がそのコミュニケーションの様態を極めて卒直明快なものとしてさせている事実は否めないところだ。事の善悪、好き嫌いとは別として、日本語とのこの面での相違は真に対照的である。日本人の場合はその *communication* に於いて、先天的な宿命でもある性別・年齢別の差異は云うに及ばず、謂わば後天的に定められた各人の社会的な位置関係（例えば職場に於ける上下関係）、社会的役割の違い（例えば店員対顧客、市職員対市民、TV番組の司会者対出演者の関係等、この区分けに属する人間関係は無数に有り得よう）、更に親疎関係（*in-group* 内の人間か、それとも *out-group* に属する人間か、個人的にどの程度見知っているか、どの程度の親しさであるか等々）などに応じてまるでカメレオンの如くその表現様態を千変万化させねばならぬ。同じ内容の情報を伝えるのに、例えば英中両語に於いてせいぜい一つか二つの様態しかない場合でも、日本語のそれとなる十を越す位の様々の表現形式が可能であるのは珍しくない。世界的に名高いデンマークの言語学者 *Otto Jespersen* (1860-1943) の次の言葉は何よりも日本人のコミュニケーション様態の核心を鋭く突いたものとして評価され得よう。

『欧州人が言語に関して社会的不平等から苦しむ所は、その言語が全く平身低頭の屈従を反映している東洋人に於て見る所に比すれば、敢て取るに足らない。日本人は話しかける人によって *thou* 或いは *you* に対してのみならず、*I* に対しても、異なる語を持っている。日本人がこの方面に如何に深く進んでいるかは、子供がその友達や遊び仲間に話し掛ける時に用い、其他の場合には決して用いない、僕及び君が、元来「下僕」及び「君主」を意味したと云う事実から分る。』

(O. Jespersen「人類と言語」pp. 195-6 須貝・真鍋訳)

例えば日英語の談話様態の差異と云う事では、又「文の成分」がどの程度現れるかと云つた問題もある。これを逆に云えばどの程度その談話を取巻く場面状況 (*situation*) や文脈 (*context*) に依存する或いはそれらを利用して発話するかと云つてもよい。よく云われることは、日本語には「文の成分」が現れることが少く、出来る限りその対話の行われる場面状況や文脈を利用した物云いが行われるとある。確かに代名詞などについてはその事は明らかに云えそうである。英語はかなり文法的には律義な言語で、談話体にも謂ゆる「文の成分」が現われる事が多い。比較的には確かにその様な事実が指摘され得るかも知れぬが、併しこれをもって日本語の談話体の方が従つて簡潔な表現となっているや否やについては大いに疑問が残る。日本語の場合、その敬語・敬意表現については云うに及ばず、音声面からの談話効果に及ぼす影響が左程でなく、その分余計な附属語の使用が多くなる。英語の場合確かに例えば人称代名詞が頻出するが、それら人称代名詞は英語の場合すべて単音節語 (*monosyllables*) であり、更にその他の語についても単音節ないし短音節の語が

多いので、それほど冗長な感じはない。更に英語は音声面からは非常に「表情豊かな言語」であり、従って謂ゆる「一語文」(one-word sentence)の成立要件も日本語に比し遙かに高い。従って日本語では「文の成分」をよく省略して云うのでその表現が簡潔云々との俗説は容易には信じ難い。しかしこの面からの日英両語の表現様態の比較も一考に値するものである。

最後にこれは言語上の問題と云うよりも、その背後にある非言語的な要素、例えば社会心理や、文化伝統と云った面から考えてみた場合、英米人の歴史、社会を含めた文化様式一般が、そのコミュニケーションの様態の上に色濃く投影されて、英語の表現形式の構成要因の一つを形成しているのではないかと云うことである。英米の文化も当然にその源の一つをギリシアの古典文明に発しており、これをそのコミュニケーションの様態と云った面で見れば、例のソクラテス(Socrates)の弁証法(dialectics)に端を発し、その伝統を未だに受継いでいると云える。それはあくまでも問答・対話と云う方法をとって、自らの思想を分析し、虚偽の観念を去り、漸次正しい結論へと議論を導いて行く極めて啓発的方法であり、そこでは「明晰な表現」が最も尊重され、不明瞭でアイマイな表現は忌避される。日本人好みの「含み」「余韻」「畳し」などの入り込む余地はない。その歴史の出発の当初よりすでに西洋人と例えば日本人などの mentality や communication の様態には大きな差異の存する所以である。この様な異なった文化伝統の様式を背負った英米人と日本人の自己表現や対話様式が、今日見るが如き大きな違いを持った communication の姿となって現われているのも当然であろう。この面からの分析もそれなりにもっと必要であったと思うが、これは独立の一つのテーマとも成り得るものであまり深入りはしなかった。又の機会を待ちたい。

む す び

ここでは主として「談話体」に於ける名詞表現と云う事で論を進めてきた。「談話体」と云った場合は、謂ゆる書きコトバから成る「文章体」とは異なり、その特定言語を用いる集団の人達の communication の様態の如何がその表現形式に決定的に重要な影響を与えることになる。「文章体」の場合であれば、特定言語の文法構造や語彙体系などが重要な要素となって機能するわけであるが、「談話体」に於ける場合は、その言語を用いる人間集団の中での人間関係の在り方、歴史伝統に基づく社会構造の違いや文化価値体系の相異等々の諸要素がその verbal (場合によっては vocal と云ってもよい) communication の様態をも決定付ける働きをするわけで、必ずしも当該言語の持つ単なる物理的な側面だけで、その様態や表現形式が決定されるわけのものではない。例えば日本語の場合で考えてみて、その取扱われる内容にもよるが、一般に「文章体」で書いた場合には、「談話体」での直接面と向って行われる問答よりも、例えば敬語や敬意表現が比較的少く、又例えば文末を「云い切る」ような終止形の使用も容易に行い得ると云うことがある。又男女の言葉の差と云った面でも文章体に於ける場合、談話体のそれに比しさほどの大きなものとはなるまい。「普通体」・「丁寧体」と云った文体の面からもほぼ同様の事が云い得よう。

当小論文では、純粋に文法的な側面からの approach により英語に於ける名詞表現の多用を説明せんとしたことも当然ながら、同時に特に「談話体」を主題としたからには、その言語集団の社会的・文化的諸要素を含めた謂わば non-verbal factors の与える communication 様態への影響についても同様の指摘を行ってきた積りである。これらの異なった二つの側面は場合によっては、複雑に絡み合って必ずしも判別が容易でない場合もなき

にしもあらずと云った点もないではない。例えば英語や中国語に見られる、謂ゆる一語文 (one-word sentence) の多用などはその典型例と云えよう。更に communication の様態比較については、英中両語の類似点としては、「普通体」vs.「丁寧体」、「男言葉」vs.「女言葉」と云った日本語に見られる様な対立は原則としては殆んど見られないこと、逆に中日両語の類似点としては、その実際の談話の中に必ずしも「文の成分」がすべて現れるわけではなく、その会話の場面・状況、前後の文脈等に多く依存し、一種の「思い込み」乃至は以心伝心的な communication の様態の見られることなどが挙げられよう。しかしこれらの問題は簡単には論じ得ない程複雑な要素がそれぞれに内在しており軽々に結論を出せる様な類いのものでは有り得ない。ただ数多くの用例を列挙して、その各々について綿密な検討を加えて比較対照を行なっていく以外に方法はあるまい。ここではそのほんの一端を御披露に及んだに過ぎない。筆者としては今後ともにこれらの問題を考究し続ける所存であり、機会を見て又それらを発表して行きたいと思っている。

参 考 文 献

講座日本語学10 外国語との対照Ⅰ 明治書院 pp. 31~52. 中国語構文論の基礎 大河内康憲
講座日本語学12 外国語との対照Ⅱ 明治書院 pp. 241~251. 中国語一日中の称呼一 蘇徳昌
中国語研究学習双書14 中国語と英語 大原信一著 光生館 pp. 1~14 I. 単音節性と分析性
日本語のはたらき 羽根田寛司著 人間の科学社 第一章 問題の微視的側面 一語イ体系 pp. 3~54.

現代中国語辞典 香坂順一編著 光生館

“Growth and Structure of the English Language” by Otto Jespersen, Ninth Edition, Doubleday Anchor Books, Doubleday & Company, Inc., Garden City, New York.

“Words in the making” by G. H. Vallins, A & C Black Co., Ltd. London.

“The Dry and Lawless Years” by John H. Lyle, Transworld Publishers, London.

“Murderers Sane & Mad” by Miriam Allen de Ford, An Avon Book, New York.

現代教養英語読本 小林永二著 白鳳出版社

英語名詞表現の諸相については、特に第四章「興味深い英語イディオム考」pp. 67~102 の箇所を御参照願いたい。直喩 (simile) に於ける名詞表現の諸例を数多く挙げてある。更に特定の動詞と名詞との結合より成る連語 (collocation) 「V+(冠詞)+N」型の名詞表現の諸例も挙げておいた。

英語に於ける communication 様態の中で特に感情表現のそれについては、第七章「英語における感情表現の研究」(pp. 139~159) を御参照願いたい。名詞一語ズバリに依る感情表現、代名詞乃至は形容詞を伴った「名詞止め」に終る表現、更には謂ゆる「一語文」(one-word sentence) 等数多くの実例が挙げられている。

日本人の mentality 及びその具体的表現としての日本語に於ける communication 様態については、特に第一章、第七章、更には本書の付録部分の随所に散見され得るが、興味のある方は更に pp. 7~8, 13, 16~17, 140~141, 155~159, 167, 170, 172, 184~185 の辺りを御参照頂きたい。

現代英語の語法研究 小林永二著 泉屋書店

本書に関しては一応 from cover to cover に読んで頂きたいが、特に第一章「英語らしい表現研究」については、§1~§4 までを一応通読願いたい。「英語らしい表現」とはつまりそれだけ日本語の表現から遠い表現であることがお解り頂けよう。第二章は英語名詞表現研究の集大成とも言えるもので、特に豊富な実例の数々を御検討頂きたい。第三章「日本語内部の矛盾と対立」のところ、特に §3 と §4(I) の 2 箇所に御注目願いたい。日本語に於ける「名詞表現」の実態が瞥見され得よう。第四章は §3 The Japanese-style communication reconsidered をお読み頂きたい。

Summary

Each language has its own two forms of style, that is, the spoken form and the written one. In this essay, special attention is paid to the spoken form of English in comparison with those of Japanese and Chinese. Much has so far been said of the dominant role of noun over other parts of speech in English. And this is particularly true of its colloquialism, as in greetings, exclamatory expressions, daily conversations and the like.

These noun-centered expressions give each sentence the flavors of simplicity, masculinity, incisiveness, etc., etc., which are characteristic of the English language in particular. In this connection, abundance in monosyllables in English also contributes to those flavors, particularly in the spoken form. Most monosyllables can be used both ways, as verb and also noun, and they are mainly composed of Anglo-Saxon words, on which English colloquialism is mostly based.

As for some examples of noun-centered expressions in English given here, you may also find their counterparts in Japanese, to be more correct, in Chinese-originated Japanese. It is common knowledge that the Chinese language is basically monosyllable-dominated, whereas Japanese is basically polysyllable-dominated. But the age-long exposure of our language to the Chinese one has modified not only our Japanese sound system, but also the diction itself. That means a great number of the so-called noun-centered expressions have been introduced to the Japanese language to make it more and more noun-centered. Chinese is known as one of the most noun-dominant languages, perhaps more so than English. So long as many Chinese-originated words are used in Japanese, the Japanese language can also remain noun-dominant in its own way.

In this connection, the shorter words we use, the stronger emotions we can express. And those short words are mainly composed of monosyllables. Interestingly enough, many words in the spoken form of English are monosyllables originated from the Anglo-Saxon language, especially monosyllabic noun words, short and incisive, practically play a great role in colloquial English.

Generally speaking, it is thought of as a virtue by the English-speaking people to express one's feelings as openly as possible. They seem to have no such psychological inhibitions in expressing themselves as we might have in our own language. On the other hand, candor in self-expression is not necessarily a virtue to the Japanese people. Actually, most Japanese still hesitate, or even feel guilty, to express themselves freely and openly, with the result that beating about the bush is still highly appreciated by the people in Japan.

There are many reasons for this aversion to self-expression among the Japanese people. Japan has been isolated from the rest of the world in many ways, which certainly is responsible for Japanese admiration for understatement, if not silence. Anyway, as the result of it, people here are still confined to some particularities about age, sex, status, hierarchy, etc., etc, which definitely prevent them from expressing themselves openly and freely. For example, abundance in honorifics in the Japanese language results from these attitudes toward verbal communication among the Japanese. The use of honorifics

automatically lead to redundancy in communication in which no such short, incisive expressions mainly composed of noun words as in English and possibly in Chinese are seen. Many noun words can be used as interjection in English with no verbs or particles attached. But in Japanese some verbs, auxiliary verbs or particles are mostly necessary for its honorific expressions from which Japanese people are never free in daily conversations.

In Japanese, most sentences end up in verb because word order in Japanese is 'S+V' or 'S+C+V' or 'S+O+V', and not 'S+V+O' as in English and possibly in Chinese. Also, the Japanese sentence is of 'periodic sentence', and this makes the Japanese sentence difficult to end up in noun. For both verbal and non-verbal reasons, the so-called noun-centered expressions are hard to come by in the Japanese language, and in English this works the other way round.

As for the Chinese language, it seems to be situated again about halfway between English and Japanese in many respects.

But no one can tell how far colloquialism in Japanese will be modified in the future by the recent overuse of borrowings mainly from English and traditionally still from Chinese.

One thing which I am sure can safely be said is that the Japanese language will be geared more and more to the noun-centered with the influx of so many borrowings, particularly from English. The main reason for that is that almost all the borrowings can only be introduced in the form of 'noun'. As the result of it, these foreign-borrowed noun words will play the greater part in most Japanese sentences just like Chinese-originated ones did for ages and now do and will do even in the future.

But the reality of the Japanese way of communication seems to be hard to change, admitting of some minor changes now going on. Without some drastic change in that line, it is unlikely that the Japanese language will be like English or Chinese. Honorifics in Japanese dated way back to the early times of our history and still die hard and will remain so. In other words, honorifics are deep-seated in the Japanese mind. No hasty conclusion should be drawn out of this problem. It still remains to be seen.

For the present, there is no tendency to the decreased use of honorific expressions in Japanese, even among the young generation. They are still confined to the old values and ways of thinking. In that sense, the old Japanese traditions, mental and spiritual, die hard. As long as the Japanese remain hierarchy-conscious, age-conscious, sex-conscious, ritual-minded, group-oriented, etc., etc., they cannot usually feel free to express themselves in any situations. It follows that a variety of honorific expressions we now indulge in will be handed down to posterity, with the result that no big change worth mentioning will be seen even among our future generations in the way of verbal communication. Even the overpresence of loan words from Chinese and English in contemporary Japanese seems to have little to do with the ups and downs of its honorific expressions. The same is true of word order in Japanese which still sticks to the 'periodic sentence', and not the 'loose sentence' like in English, rhetorically speaking. It may safely be said that Japanese will be Japanese.

Even the formality-confined Japanese tend to use informal expressions in their daily conversations among their family members, where they tend to leave out some particles, use less honorifics and put more emphasis on intonation, stress, rhythm, tone, etc., etc. The more informal is the situation in which conversation is carried on, the closer the Japanese way of conversation gets to those of the English and the Chinese which basically lack such an intricate 'polite form' as seen in Japanese. It shows that there is a close connection between one's state of mind or mentality and one's style of conversation. In that sense, the ritual-minded, formality-oriented Japanese seem to be never free from the 'overpolite form' in communication for the time being.

In conclusion, it can safely be said that neither English nor Chinese has such a sophisticated system of honorific expressions as Japanese has. That also contributes to the abundance of both languages in noun-centered expressions, as against the relative scarcity of them in the Japanese language.

Lastly, it is hopefully desirable to note the fact that no language can surpass Chinese in the flexibility of making compound nouns. That also shows the overpresence of the noun and its dominance over the other parts of speech in the Chinese language.

For further proof of Chinese propensity toward noun-centered expressions, more elaborate studies should be made with many-faceted examples mentioned as have been in English.

The basic sentence pattern 'S+V+O' in English has contributed to the fecundity of noun-centered expressions to a considerable extent.

On the other hand, to what extent it can be true of their Chinese counterparts still remains to be seen, for in Chinese, 'S+V+O' is not necessarily the basic pattern of the sentence.

As far as the basic sentence structure is concerned, Chinese seems to be more similar to Japanese than to English. In other words, although they share some similarities as noun-dominant languages, Chinese and English still have not a few differences in many ways.